

古文Ⅲ

「古文Ⅲ」の特長と使い方

●本書のねらい

このテキストは、文法編と読解編で構成されています。文法編では、高等学校で学習する重要古語、文語文法、古典の常識などの古文読解に必要な知識をまとめ、大学入試に臨むにあたっての知識の整理ができるように編集されています。大学入試のポイントとなる事項を整理し、効率よく学習できるように工夫されています。

読解編は、大学入試に対応できる古文読解力を養うことを目的としています。知識を身につけ、古文を読むことに慣れたら、多くの古文を読み、いろいろな問題を解いてみるという学習が必要となります。入試によく出題される作品をジャンル別に収め、古文読解の実践的な演習が積めるように構成されています。

●文法編

- 文法編は、テーマ別のまとめと演習になっています。
- テーマごとに見開きの二ページで区切りがつくようにまとめられているので、学習計画が立てやすくなっています。
- 大学入試問題を解くうえで、多くの人がつまづく事柄に重点を置いた単元構成になっています。
- 例文や問題文は入試でよく扱われる作品から引用し、出典を明示しています。

●読解編

- 読解編は、入試によく出される作品を選んでジャンル別におさめ、さまざまな設問で総合的な読解力を養うことができます。ようになっています。
- 各回の前半の二ページには基本的な問題を、後半の二ページにはより実践的なレベルの高い問題がおさめてあり、段階を追った学習ができるようになっています。
- 各回に入試のポイントとなるテーマを設け、読解演習の中でそのテーマについて重点的に学習できるようにしています。
- 各回についている「基本確認演習」で、古文・文法・古典の常識などの知識事項を確認することができます。

● 文法編の構成と使い方

○ テーマ別のまとめと演習 (P 4～43)

重要古語、文語文法、古典の常識を項目別にとりあげ、重要事項をおさえて、問題演習で確認します。

● ポイント ● ……重要事項のまとめです。最低限、ここにあげてあることは覚えておく必要があります。また、ここにあげてあることをもとに、辞書、文法書などで知識の幅を広げることも大切です。

練習問題 ……各ポイントのあとにある練習問題で、知識を確認します。

文法編

1	重要古語(1)——古今異義語・対義語・多義語……………	4
2	重要古語(2)——同音異義語・混同しやすい語・慣用句……………	6
3	体言——名詞・代名詞の種類……………	8
4	副詞・連体詞・接続詞・感動詞……………	10
5	用言(1)——動詞の活用と活用の種類……………	12
6	用言(2)——動詞の種類と用法……………	14
7	用言(3)——形容詞の活用と用法……………	16
8	用言(4)——形容動詞の活用と用法……………	18
9	助動詞(1)——「つ・ぬ・たり・り・き・けり」の意味と活用……………	20
10	助動詞(2)——「む・むず・べし・じ・まじ」の意味と活用……………	22
11	助動詞(3)——「けむ・らむ・らし・めり・まし・なり」の意味と活用……………	24
12	助動詞(4)——「る・らる・す・さす・しむ」の意味と活用……………	26
13	助動詞(5)——「なり・たり・ず・まほし・たし・ごとし」の意味と活用……………	28
14	助詞(1)——格助詞・接続助詞のはたらき……………	30
15	助詞(2)——副助詞・係助詞のはたらき……………	32
16	助詞(3)——終助詞・間投助詞のはたらき・助詞の総合演習……………	34
17	敬語(1)——尊敬語・謙讓語・丁寧語……………	36
18	敬語(2)——注意すべき敬語表現、敬語の総合演習……………	38
19	古典の常識——季節・行事・官職・装束など……………	40
20	いろいろな表現——倒置・挿入・省略・引用……………	42

●読解編の構成と使い方

○前半の二ページの演習問題……比較的易しい文章による演習

問題です。基本的な問題が確実に解けるようになることをねらいとしています。また、適宜「解法のポイント」を付して、理解を助けています。

○基本確認演習……

古語の意味・文法の知識・古典の常識などの古文読解の基礎となる知識を確認します。

○後半の二ページの演習問題……

入試標準レベルの問題で、古文の読解力を完全なものにすることをねらいとしています。

《解答・解説》(別冊)……

文法編・読解編ともに解答例とともに、詳しい「解説」と「口語訳」がついています。

読解編

1	随筆(1)——基本古語(古今異義語)……	44
2	随筆(2)——慣用句・副詞の呼応……	48
3	随筆(3)——選択問題の解法……	52
4	随筆(4)——現代語訳のしかた……	56
5	説話(1)——古典の常識……	60
6	説話(2)——登場人物の心情・性格……	64
7	説話(3)——指示語……	68
8	物語(1)——登場人物の把握……	72
9	物語(2)——接続詞の意味・用法……	76
10	物語(3)——敬語……	80
11	物語(4)——現代語訳のしかた(敬語)……	84
12	物語(5)——登場人物の心情・性格……	88
13	物語(6)——古歌の引用……	92
14	日記・紀行(1)——主語・述語の関係……	96
15	日記・紀行(2)——会話文の指摘……	100
16	日記・紀行(3)——引用・挿入句……	104
17	日記・紀行(4)——まぎらわしい語の識別……	108
18	評論(1)——段落と要旨……	112
19	評論(2)——対応表現の理解……	116
20	評論(3)——空欄補充問題……	120
21	評論(4)——主題・要旨……	124
22	韻文(1)——和歌・俳句の基礎……	128
23	韻文(2)——和歌・俳句の修辞法……	132

文法編

1

重要古語(1)——古今異義語・対義語・多義語

- 現代語と形は同じようだが意味の異なる古語は、現代語の意味が頭にあるので早合点し、誤った解釈をしてしまいがちなので注意する。
- 反対またはそれに近い意味の語は対にして覚えるのがよい。
- 一つの語で異なる意味を多くもつ古語がある。これは使われている場面・状況に応じた意味を見分ける必要がある。

●ポイント①●

◎古今異義語に注意しよう。

ありがたし——めつたにない・できそうもない・もつたにない
 いたづらなり——役に立たない・むなししい・何も無い
 いまいまし——縁起が悪い・不吉だ・憎たらしい・残念だ
 うつくし——かわいい・愛らしい・見事だ・きれいだ
 おどろく——はっと気づく・目を覚ます・目を丸くする
 さうざうし——物足りない・心寂しい
 勉強してて、おやつと思つた古語は、カードに集めて覚えるようにしたい。

↓ 次の——線部の古語の意味を答えよ。

- (1) 若くして失せにし、いとほしくあたらしくなむ。(増鏡)
- (2) 翁をいとほしく、かなしとおぼしつることも失せぬ。(竹取物語)
- (3) たれをまつ虫こころ鳴くらむ。(古今集)
- (4) あてやかに心にくき人にはあらじ。(源氏物語)
- (5) 二年ばかり旧る宮にながめ給ひて、(源氏物語)

- (6) 下簾のはざまの開きたるより、この男まもれば、(大和物語)
- (1) () () (2) () ()
- (3) () () (4) () ()
- (5) () () (6) () ()

●ポイント②●

◎対にして覚えるよい語

いも——男性から女性を親しみをこめて呼ぶ語。妻・恋人。
 せ——女性から男性を親しみをこめて呼ぶ語。夫・恋人。
 うつつ——現実・目の覚めている状態。意識の確かな状態。
 ゆめ——夢・夢のようにはかないこと。
 かたほ——不完全なこと・不十分である・未熟だ。
 まほ——完全であること・十分である・直接・じか。
 ひなぶ——田舎じみている・田舎めく・下品だ。
 みやぶ——上品だ・優雅だ・みやびやかである。
 まうづ——参上する・うかがう・参詣する。
 まかづ——退出する・さがる。
 よろし——好ましい・適当である・悪くはない。
 わろし——感心しない・よくない・見劣りがする。
 他にもへあるじ・まらうとへいぎたなし・いざとしへおこす・やるへ今めかし・古めかしへみいる・みやるへまかる・まるるへなど、対にして覚えるとよい語がある。調べよう。

2 次の各文の()に適する古語(適当に活用させる)はア・イどちらか、符号で答えよ。

(1) ① () 男ども二十人ばかりつかはして、
 ② かりそめに言ひちらされし () たはぶれごと、

ア あだなり イ まめなり (①竹取物語・②柴門の辞)

(2) ① いとはかなうものし給ふこそ () 。
 ② まめやかにものし給ふ君なれば、 () 思し譲れり。

ア うしろやすし イ うしろめたし (①・②とも源氏物語)

(3) ① はしたなき交らひの () 、身を思ひ悩みて、
 ② 滝口なれば、弓弦いと () うち鳴らして、

ア つきづきし イ つきなし (①・②とも源氏物語)

(4) ① 心ばせある少将の尼、 () 人、童ばかりぞ、
 ② 主上は今年三歳、まだ () ましましければ、

ア おとなし イ いとけなし (①源氏物語・②平家物語)

(5) ① たびたび行きけれども、いと () もてなして、
 ② 髪ゆるるかにいと長く、 () 人なり。

ア めやすし イ はしたなし (①十訓抄・②源氏物語)

●ポイント③●

◎多義語は、そのもつ意味のどれを訳にあてはめるかを判断することが必要である。

あはれなり——①しみじみとした情趣がある。②心が引かれておもしろい。美しい。③やさしく優美だ。④かわいい。いとしい。⑤気の毒だ。ふびんだ。⑥感慨無量だ。⑦愛情が深い。やさしい。⑧りっぱだ。感心だ。

みる——①見る。目にとめる。②会う。③遭遇する。④結婚する

る。妻とする。⑤世話をする。⑥処理する。取り扱う。⑦ころみる。⑧見て判断する。⑨理解する。悟る。
 こうした多義語は、語源的な意味と語感を知って、その場面・状況にそって考えたとよい。「あはれなり」は、しみじみと深く身にしみる感じの語であり、「みる」は目をはたらかせて物事を見て認める語である。

3 次の——線部の意味はどれか、あとの符号で答えよ。

(1) ① かかることは文にも見え^ぶず、伝へたる教へにもなし。
 ② 京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。
 ③ (梨の花を) もろこしには限りなき物にて、文にも作る。
 ④ ありたきことは、まことしき文の道、

ア 手紙 イ 漢詩文 ウ 学問、特に漢学 エ 書物

(2) ① けづることをうるさがり給へど、をかし^の御髪や。
 ② 裾をかしようからげて、路の枝折^しりとうかれたつ。
 ③ (螢が) ほのかにうち光りて行くもをかし。
 ④ (猫は) いみじうをかしければ、かしづかせ給ふ。

ア 風情がある イ こっけいだ ウ 美しい エ かわいい

(3) ① さるべきたよりたづねて、七月七日言ひやる。
 ② たよりごとに、物も絶えず得させたり。
 ③ 庭の草木も心あるさまに、簀子^{すいこ}・透垣^{すいが}のたよりをかしく、

ア 機会・ついで イ 具合・配置 ウ 縁故・てづる

① () ② () ③ () ④ ()

① () ② () ③ () ④ ()

① () ② () ③ () ④ ()

文法編

5

用言(1)

動詞の活用と活用の種類

● 自立語のうち、動詞・形容詞・形容動詞を総称して用言という。単独で述語となることができる。

● ポイント ①

◎ 動詞のはたらきと性質

動詞はものごとの動作や作用や存在を表す語である。

動詞は、その前後の語によって形を変える。これを「活用」といい、言い切りの形がラ変を除き「ウ段の音」となる。

また、連用修飾語で修飾され、名詞を修飾する。

◎ 動詞の活用と活用の種類

● 活用形には六つの種類がある。

未然形——動作が未だ終わらない形

連用形——用言に連なる形

終止形——言い切りの形

連体形——体言に連なる形

已然形——動作が已に終わった形

命令形——動作を命令する形

● 活用の種類 (活用型) は九つの種類がある。

四段活用・上一段活用・上二段活用・下一段活用・下二段活用・カ行変格活用・サ行変格活用・ナ行変格活用・ラ行変格活用

● 四段活用・上一段活用・上二段活用・下二段活用は、その活用のパターンをしっかりと暗記しよう。

上一段活用動詞——「着る・似る・煮る・干る・見る・射る・

鑄る・居る・率ゐる・用ゐる」など語幹

と語尾の区別がつかない語、十九語

下一段活用動詞——「蹴る」の一語のみ

カ行変格活用動詞——「来」(及びその複合語)の一語のみ

サ行変格活用動詞——「す」(及びその複合語)と「おはす」

の二語

ナ行変格活用動詞——「死ぬ・往ぬ(去ぬ)」の二語

ラ行変格活用動詞——「あり・居り・侍り・います(そ)が

り」の四語

その他(ア行・ワ行・ザ行は下二段活用。ヤ行は上二段活用)

ア行に活用する動詞——「得・心得」の二語

ワ行に活用する動詞——「植う・飢う・据う」の三語

ザ行に活用する動詞——「混ず(交ず)」の一語

ヤ行に活用する動詞——「老ゆ・悔ゆ・報ゆ」の三語

！ 次の文のA・Bについて、文中の動詞を全て抜き出せ。

A 大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも

()

B あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住みは
つるならひならば、いかに物のあはれもなからん。

()

2 次の文の——線部①～⑩の動詞の活用形を記せ。

道々の物の上手のいみじき事など、かたくななる人のその道しらぬは、そぞろに神のごとくにいへども、道しれる人は更に信もおこさず。おとに聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。かつ、あらはるをもかへりみず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることときこゆ。
(徒然草)

※かたくななる人——頑固で物の道理のわからない人。
そぞろに——漫然と、むやみに。 かつ——一方では。

- ① () 形 ② () 形 ③ () 形
- ④ () 形 ⑤ () 形 ⑥ () 形
- ⑦ () 形 ⑧ () 形 ⑨ () 形
- ⑩ () 形 ⑪ () 形

3 次の文の——線部①～⑩の動詞の種類の活用形を記せ。

昔、男女、いとかしこく思ひかはして、異心なかりけり。さるをいかなることありけむ。いささかなることにつけて、世の中をうしと思ひて、出でていなむと思ひて、かかる歌をなむよみて、ものに書きつけける。

出でていなば心軽しといひやせむ世のありさまを人は知らねばとよみおきて、出でていにけり。
(伊勢物語)

※いとかしこく——たいそう深く。 異心——浮気心。

- ① () 活用 形 ② () 活用 形
- ③ () 活用 形 ④ () 活用 形

- ⑤ () 活用 形 ⑥ () 活用 形
- ⑦ () 活用 形 ⑧ () 活用 形
- ⑨ () 活用 形 ⑩ () 活用 形
- ⑪ () 活用 形

4 次の() に、指示した動詞の活用形を入れよ。

① 「死ぬ」の未然形 ② 「す」の未然形
() ば、いかがは () む。

③ 「去ぬ」の連体形 () 朔日つひたちの日の夢に、

④ 「あり」の已然形 () ばなるべし。

⑤ 「受く」の命令形 () 。

⑥ 「過ぐ」の已然形 () ば、はるばると浜に出でぬ。

5 次の文の——線部のカ行変格活用動詞「来」の読み方を記せ。

(1) 手に入れて家へ持ちて来ぬ。
(竹取物語)

(2) 散る花も又来む春は見もやせむ
(更級日記)

(3) 「とく来」と言ひやりたる。
(枕草子)

(4) 夏果てて、秋の来るにはあらず。
(徒然草)

(5) 春来れば雁帰るなり
(古今集)

- (1) () () (3) ()
- (4) () () () ()
- (5) () () () ()

文法編

9

助動詞(1) 「つ・ぬ・たり・り・き・けり」の意味と活用

● 付属語で活用があるものが助動詞で、自立語について、いろいろな意味を添えたり、叙述をくわしくするはたらきがある。

● 助動詞を征服すれば、古文の理解は容易になるが、これを理解するには、助動詞の意味・活用・接続の三つを暗記する必要がある。

● ポイント ①

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	意味	接続
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ	完了強意	連用形
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	完了強意	連用形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)	完了・存続	連用形
り	ら	り	り	る	れ	(れ)	完了・存続	命令形 四段 未然形 サ変
き	(せ)	○	き	し	しか	○	過去	連用形
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○	過去・詠嘆	連用形

● 強意(確述とも)の意を表す「つ・ぬ」は、下に推量の助動詞の「む」「ぬ」「べし」「まし」などを伴う形をとることが多い。

「てむ・てん」「なむ・なん」「つべし」「ぬべし」
「てまし」「なまし」

● 「り」の四段活用助動詞の接続は已然形とする説もある。
● 「き」が力変・サ変に続くときは次の特殊なつきかたをする。

こ(未然) し
し(連用) き
し(連用) し
せ(未然) し
し(連用) き

● 「き」の未然形「せ」は、「せば」という仮定条件を表すときにだけ用いられている。

● 「けり」の未然形「けら」は奈良時代に用いられた。

● 完了の助動詞「つ」の連用形「て」に過去の助動詞「けり」がついた、「てけり」の転じた「てんげり」は軍記物語に多くみられる。討ち死にしてんげり。(平家物語)

↓ 次の各文の——線部の助動詞の活用形と意味を答えよ。

- (1) 「雀の子を犬君が逃がしつる。」 (源氏物語)
- (2) 翁の申さんことは聞き給ひてむや。 (竹取物語)
- (3) 潮満ちぬ。風も吹きぬべし。 (土佐日記)
- (4) うやうやしく言ひたりしこそ、いみじく覚えしか。 (徒然草)
- (5) 見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりけり。 (古今集)
- (6) 乾飯の上に涙落としてほとびにけり。 (伊勢物語)
- (7) 一人一人にあひたてまつり給ひぬ。 (竹取物語)

- (1) ()
- (2) ()
- (3) ア ()
- イ ()

3

次の各文A・BまたCの——線部の文法的違いを説明せよ。

- (1) A かしこに女こそありけれ。
 B 神樂こそなまめかしくおもしろけれ。
 (源氏物語) (徒然草)
- (2) (1) () (2) ()
- (3) () (4) ()
- (5) () (6) ()

2

次の各文の()に「たり」または「り」を、それぞれ適する活用形で入れよ。

- (1) 道知れ()人もなくて、惑ひ行きけり。
 (伊勢物語)
- (2) 陰陽師のもとなる童こそいみじく物は知り()。
 (枕草子)
- (3) 稲荷に詣で()ましかば、かからずやあらまし。
 (更級日記)
- (4) かぢとりは船唄をうたひて何とも思へ()ず。
 (土佐日記)
- (5) 常よりも物思ひ()さまなり。
 (竹取物語)
- (6) あだなりと名にこそ立て()桜花年にまれなる人も待ちけり
 (古今集)
- (7) () () () () () () ()

(2)

A 美麗をもとむることなかれ。
 B 四十^{よそぢ}あまりの春秋をおくれるあひだに、
 (徒然草) (方丈記)

(3)

A (螢が)ただ一つ二つなどほのかにうち光りて行くもをかし。
 (枕草子)

B その人、影も見え給はずなりにき。
 (宇津保物語)

C 猛き物もつひには滅びぬ。
 (平家物語)

(4)

A 日しきりにとかくしつつののしるうちに、夜ふけぬ。
 (土佐日記)

B たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし桜もうつろひに
 けり
 (古今集)

(5)

A わが宿の池の藤波さきにけり。
 (古今集)

B 顔はいと赤くすりなして立てり。
 (源氏物語)

●助詞は付属語で活用がなく、自立語について、その自立語と他の語との関係を示したり、いろいろな意味を添えたりする。

(1) 格助詞 体言や体言に準ずる語(連体形など)について、その語が下の語に対し、どのような資格(格)をもつかを示すもの。

(2) 接続助詞 活用語について、上の文節を下の文節に接続するもの。

●ポイント①●

◎格助詞の表す主なはたらき

- が 主格(…ガ)・連体修飾格(…ノ)・体言の代用(…ノモノ・…ノコト)
- の 主格(…ガ)・連体修飾格(…ノ)・体言の代用(…ノモノ・…ノコト)・同格(…デ)・比喩(…ノヨウニ)
- を 動作の対象(…ヲ)・経過する場所や時(…ヲ…ヲ通ツテ)・動作の起点(…ヲ…カラ)
- に 場所や時間(…デ…ニ)・動作の対象(…ニ)・動作の目的(…タメニ)・変化の結果(…ニ…ト)・受身や使役の対象(…ニ)・比較の基準(…ニ比べて…ヨリ)
- へ 動作の方向(…ヘ…ニ向カッテ)
- と 動作の相手(…ト)・変化の結果(…ト)・引用(…ト)・比較の基準(…ト比べて)・比喩(…ヨウニ)
- より 動作の起点(…カラ)・比較の基準(…ヨリ)・経由する場所(…カラ)・手段や方法(…デ…ニヨッテ)・即時の反応(…スライナヤ…トスグニ)・事物の限定(…ヨリ)

にて 場所や時間(…ニ…デ)・手段や材料(…デ…ニヨッテ)・原因や理由(…ノデ…カラ)

して 手段や方法(…デ…ニヨッテ)・動作の相手(…ト…トトモニ)・使役の相手(…ニ命ジテ…ヲ使ッテ)

― 次の―線部の「の」「より」のはたらきはどれか、あとから選
びそれぞれ符号で答えよ。

- (1) 鮒なよりはじめて、川がも海もも、
 - (2) 師走の二日、京に入る。
 - (3) 世には心得ぬ事の多きなり。
 - (4) いと清げなる僧の、黄なる袈裟着たるが来て、
 - (5) 秋風にあへず散りぬるもみぢ葉の行くへ定めぬわれぞ悲しき
 - (6) 徒歩より参れば道遠し。
 - (7) 常よりも物思ひたるさまなり。
 - (8) 大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。
 - (9) 名を聞くより、やがて面影推しはからる心地するを、
- ア 主格 イ 連体修飾語 ウ 体言の代用 エ 同格
- オ 比喩 カ 動作の起点 キ 手段・方法 ク 事物の限定
- ケ 即時の反応 コ 経由する場所 サ 比較の基準
- | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| (1) | () | (2) | () | (3) | () | (4) | () |
| (5) | () | (6) | () | (7) | () | (8) | () |
| (9) | () | | | | | | |

●ポイント②●

◎接続助詞の表す主なはたらき

ば 未然形に接続し 順接の仮定条件(モシ…ナラバ)

已然形に接続し 順接の確定条件(…ノテ…カラ…ト

コロ…ト…トイツモ)

とも 終止形・形容詞は連用形に接続し 逆接の仮定条件(…ト

シテモ)

ど・ども 已然形に接続し 逆接の確定条件(ダガ・ケレドモ)

が・に・を 連体形に接続し 単純接続(…ガ…ト…スルト)

順接(…ノテ…カラ)・逆接(…ノニ…ガ)

て 連用形に接続し 単純接続(…テ)・原因・理由(…ノテ)

まれに逆接として(…ガ…ノニ)

して 連用形に接続して単純接続(…テ…デ)

で 未然形に接続し 打消(…ナイデ…ズニ)

つつ 連用形に接続し 動作の反復・継続(…テハ…シ続ケテ)

動作の並行(…ナガラ)、和歌の終止の用法は詠嘆を含む。

ながら 連用形・形容詞と形容動詞の語幹に接続し 動作の並行

(…ナガラ)・逆接の確定条件(…ノニ…ガ)

ものの・ものから・ものを 連体形に接続し 逆接の確定条件(…

ガ…ノニ)、「ものを」は詠嘆的に(…ノニナア)の意味

をも表す。

◎「が」「に」「を」の識別

(1) 体言+が・に・を↓格助詞

(2) 連体形+が・に・を↓その連体形の下に「コト・トキ・モ

ノ」などの体言が補えれば格助詞。補えなければ接続助詞。

(3) 「に」の場合、ア「連用形+に」は完了の助動詞「ぬ」、イ

「体言+に」は断定の助動詞の連用形もある。ウ「おだやかに」
「往いに」のように、形容動詞やナ変動詞の連用形活用語尾、「つ
ひに」のように副詞の一部もあるので注意。

2 次の 線部は、A 格助詞、B 接続助詞、C サ変動詞+接続助

詞、D 完了・強意の助動詞のどれか、それぞれ符号で答えよ。

(1) 桂川、月のあかきにや渡る。()

(2) 深き志はこの海にも劣らざるべし。()

(3) 十月つごもりなるに、紅葉散らで盛りなり。()

(4) かのわたりなむ、いとけ騒がしうなりにて侍る。()

(5) ありつる隨身して(返歌を)つかはす。()

(6) 事毎なす事なくして、身は老いぬ。()

(7) あやまちすな。心して降りよ。()

(8) 行き行きて駿河の国に至りぬ。()

(9) この男垣間みてけり。()

3 次の各文の 線部を現代語訳せよ。

(1) 月は有明けにて、光をさまれるものから影さやかに見えて、

(2) 十月雨間も置かず降りかむらつちあまにせばいづれの里の宿か借らまし

(3) み吉野の山かきくもり雪降ればふもとの里はうちしぐれつつ

(1) ()

(2) ()

(3) ()

● 会話や文章で、話し手・書き手（作者）が、聞き手・読み手（読者）あるいは話題の人物に対して敬意を表すために用いたことばが敬語である。

● 敬語の種類は尊敬語・謙讓語・丁寧語である。

● 敬意を表現する方法には名詞や接頭語・接尾語による方法もあるが、ここでは大切な敬語の動詞・補助動詞・助動詞をとりあげる。

● ポイント① ●

◎ 尊敬語

話題の人の動作を高めて、その動作の主体（為手）に対する、話し手・書き手の敬意を表すもの。主体敬語・為手敬語ともいう。
● 尊敬の意を表す主なことば

品詞	敬語	ふつうの表現	現代語訳
動詞	あそばす	す・なす	ナサル
	おはす・おはします	あり・行く	イラッシャル
	す・います・ます	来	オイデニナル
	仰す・のたまふ	言ふ	オツシヤル
	おもほす・おほす・おほしめす	思ふ	オ思イニナル
	きこす・きこしめす	聞く・飲む・食ふ	オ聞きニナル 召シアガル
	御覧す	見る	ゴ覧ニナル
	大殿ごもる	寝(ぬ)	オヤスミニナル

品詞	敬語	現代語訳
動詞	召す	呼ぶ・着る・乗る・飲む・食ふ
	たまふ・たうぶ・たぶ・たまはす	召シヤガル クダサル オ与エニナル
補助動詞	たまふ(四段)・たうぶ・たぶ・おはす・おはします	オ…ニナル・オ…ナサル・…テイラッシャル
助動詞	る・らる	オ…ニナル
詞	す・さす・しむ	オ…ナサル

◎ 謙讓語

動作の主体を低めて、その動作の及ぶ対象(客体・受け手)に対する敬意を表すもの。客体尊敬・受け手尊敬ともいう。
● 謙讓の意を表す主なことば

品詞	敬語	ふつうの表現	現代語訳
動詞	承る	聞く・受く	ウカガウ・オ受ケスル
	候ふ・侍り	仕ふ・あり	オソバニ控エル
	奉る・奉らす・参らす	与ふ	サシアゲル
	たまはる・たばる	受く・もらふ	イタダク

動詞	品詞	敬語	現代語訳
つかまつる・つかうまつる			シテサシアゲル
申す・聞こゆ・奏す・啓す			申シアゲル
参る・まうづ			参上スル・アガル
まかる・まかつ			退出スル・サガル
行く・来			
行く・出づ			
たてまつる・まうす・きこゆ・まるる・まゐらす			オ…申シアゲル…テサシアゲル・イタス
たまふ(下二段)			…サセテイタダク

◎丁寧語

話し手・書き手が、自分の話し方や書き方を丁寧にし、聞き手や読み手に敬意を表すもの。

●丁寧の意を表す主なことば

品詞	敬語	ふつうの表現	現代語訳
動詞	侍り・候ふ	あり・をり	アリマス・オリマス・ゴザイマス
品詞	敬語	現代語訳	
補助動詞	はべり・さぶらふ・さぶらふ	マス・デス・ゴザイマス	

次の——線の敬語はA尊敬語、B謙讓語、C丁寧語のどれか、それぞれ符号で答えよ。

- (1) むかし、田邑たじの帝と申す帝おはしましけり。(伊勢物語)

- 2 次の各文に補助動詞があれば○で囲み、——線を敬語に注意して現代語訳せよ。

- (1) おほやけに御文奉り給ふ。(竹取物語)
- (2) この御方の御いさめをのみぞ、なほ、わづらはしく、心苦しう思ひ聞こえさせ給ひける。(源氏物語)
- (3) この五六日、ここに侍れど、病者はうじのことを思う給へあつかひ侍るほどに、隣のことは、え聞き侍らず。(源氏物語)
- (4) 我は宮の生まれさせ給ひしより、いみじう仕うまつれど、まだおろしの御衣一つ賜はらず。 ※おろし——おさがり。(枕草子)
- (5) 極楽浄土とて、めでたき所へ具しまゐらせ候ふぞ。(平家物語)

● 古典の世界は季節感に満ちている。その季節を正しくとらえることは、古文理解のポイントでもある。年中行事や季節の景物は時季を正しくとらえたい。また、官職や建物・住居や衣服などの知識をもつことも、古文征服のある面からの基礎でもある。

● ポイント ① ●

1 季節と景物（四季折々の風物）

- ・ 春——陰曆一〜三月 ・ 夏——陰曆四〜六月
- ・ 秋——陰曆七〜九月 ・ 冬——陰曆十〜十二月
- 春の景物——東風・霞・春雨・朧月・鶯・梅・柳・桜・藤・山吹・帰雁

夏の景物——五月雨・ほととぎす・水鶏・卯の花・花橘・葵・牡丹・なでしこ・菖蒲・夕顔・螢

秋の景物——秋風・霧・初雁・鹿・きりぎりす・松虫・鈴虫・女郎花・尾花・萩・紅葉・桔梗

冬の景物——時雨・霜・雪・霰・木枯・落葉・千鳥・網代

2 季節の主な行事

- 春の行事——四方拝・若菜摘み・白馬の節会・県召の除目・踏歌・子の日の遊び（上の子の日、小松引き・若菜摘み）・卯杖（上の卯の日）|| 以上一月、祈年祭・大原野祭 || 以上二月、上巳の節会（曲水の宴）・雛祭 || 以上三月
- 夏の行事——更衣・灌仏会・賀茂祭（中の酉の日、葵祭） || 以

上四月、端午の節会 || 以上五月、夏越し（名越し）

の祓 || 以上六月

秋の行事——七夕（乞巧奠）・盂蘭盆・相撲の節会 || 以上七月、

観月（中秋観月・月の宴）・彼岸（七日間） || 以上

八月、重陽の節会（菊の節供）・後の月見（後の名

月：九月十三日） || 以上九月

冬の行事——更衣・亥子餅 || 以上十月、新嘗祭・豊明節会 ||

以上十一月、御仏名（十九日から三日間）・追儺

（大晦日）・荷前（不定日） || 以上十二月

↓ 次の各歌を読み、あとの問いに答えよ。

- (1) 春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる
- (2) 五月まつ山郭公うちはぶき今も鳴かなむ去年の古こゑ
- (3) 秋萩の花咲きにけり高砂のをのへの鹿は今や鳴くらむ
- (4) さ夜千鳥声こそ近くなるみ潟かたぶく月に潮や満つらん

(1)〜(3) 古今集 (4) 新古今集

問1 それぞれの歌から季節を表す語・語句を書き出して示せ。

- (1) ()
- (2) ()
- (3) ()
- (4) ()

問2 ①②の歌の「五月」は古文としてふつう何と読むか、また②次

の月は古文としてA何と読み、B何月をいうか。

①	()	ア 睦月 A	()
		イ 如月 A	()
②	ウ 卯月 A	B	月
	エ 長月 A	B	月
	オ 師走 A	B	月

●他の暦月の異名、弥生(三月)・水無月(六月)・文月(七月)・葉月(八月)・神無月(十月)・霜月(十一月)

2 次の一線①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩の語の読み方を現代仮名遣いで書け。

- (1) ① 上達部 ② 殿上人 ③ 殿上人に^④対面する人は、(更級日記)
- (2) ① 直衣 ② 指貫 ③ 生絹のひとへなど着たるも (枕草子)
- (3) ① この院の内に御曹司を作りて、(源氏物語)
- (4) ① 遣水の音のどやかなり。(徒然草)
- (5) ① 三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、(枕草子)
- (6) ① 清涼殿の丑寅のすみの、(枕草子)
- (7) ① 二十一日、卯の時ばかりに船いだす。(土佐日記)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()
- ⑥ ()
- ⑦ ()
- ⑧ ()
- ⑨ ()
- ⑩ ()

●ポイント②●

◎官職・装束・住居と調度・時刻や方位の常識語を次に示す。しつかり覚えよう。十二支はその順序も知っておこう。

●官職に関するもの

上達部(三位以上の公卿と四位の参議)・殿上人(殿上の間に昇殿を許された人)・藏人(天皇にそば近く仕えた役人)・受領(諸国の長官・国の守)・舍人・隨身・女御(中宮に次ぐ地位の皇妃、その下が更衣)・御息所(皇子を生んだ皇妃や皇太子妃などをいう)・命婦・地下(清涼殿の殿上の間に昇殿を許されていない官人)

●装束に関するもの

束帯(男性貴族の正式の服装)・直衣(男性貴族の平服)・指貫(直衣や狩衣のときにはく、くくり袴)・烏帽子(男子のかぶりもの、冠より略式)・唐衣(女性が正装した時に表着の上に裳とともに着用したもの)・小袿(高貴な女性の通常礼服)

●建物・調度に関するもの

曹司(部屋)・渡殿(渡り廊下)・高欄(簀子の外側につけられた欄干)・長押(母屋と廂の間、廂の間と簀子に濡れ縁との境の柱の上下に渡した材木)・部・格子・築地(土塀)・前栽(庭先の植え込み)・籬(いけ垣)・遣水(庭に流す小さな流れ)・御簾・障子・几帳(移動式布製のついたて)・大殿油

●十二支と時刻・方向

子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥
子の刻は午後十一時から午前一時までの二時間、その真ん中が正刻で、ここを子とふつう言う。以下、丑は一時から三時まで、午の刻は午前十一時から午後一時までと二時間さざみである。

丑寅——北東 辰巳——南東 未申——南西 戌亥——北西

読解編

1

随筆(1)

基本古語(古今異義語)

演習1 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

荒れたる宿の、人目なきに、女のはばかりる事あるころにて、つれづれと籠りたるを、ある人とぶらひ給はんとて、夕月夜のおほつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のごことごとしくとがむれば、下衆女の出でて、「いづくよりぞ」と言ふに、やがて案内せさせて入り給ひぬ。心ほそげなる有様、いかで過ぐすらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷にしばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの、若やかなるして、「こなた」と言ふ人あれば、たてあげ所せげなる遣戸よりぞ入り給ひぬ。内のさまは、いたくすさまじからず、心にくく、火はあなたにほのかなれど、ものの綺羅など見えて、にはかにしもあらぬ匂ひ、いとつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞ降る。御車は門の下に、御供の人はそこそこに」と言へば、「今宵ぞやすき寝は寝べかめる」とうちささめくも、忍びたれど、ほどなければ、ほの聞こゆ。さて、このほどの事ども細やかに聞こえ給ふに、夜深き鳥も鳴きぬ。来し方行く末かけてまめやかなる御物語に、このたびは鳥も花やかなる声のうちしきれば、明けはなるるにやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れがたきことなど言ひて、立ち出で給ふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけほの、艶にをかしかりしを思し出でて、桂の木の大きなるが隠るるまで、今も見送り給ふとぞ。

(徒然草)

〔注〕 はばかりる事——物忌みなどで世間に遠慮すること。 ものの綺羅——衣類や調度品の美麗さ。

夜深き鳥——一番鶏。 桂の木——女の家の庭にある木。

問1——線部①の、この文章における意味を書け。

(a)

(b)

基本確認演習

1 次の各文の——線部の古語の意味を書け。

(1) あからさまに來て泊まり居などせんは、珍しかりぬべし。

(2) あさましう、うつくしげさ添ひ給へり。

(3) 御かたち有様、あやしきまでぞ覚え給へる。

(4) 三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり。

(5) 「こちや」とのたまへど、おどろかず。

(6) ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

(7) すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく聞きにくし。

問2 〰〰線部A、Cの読み方を書け。

(i)	()	(j)	()
(g)	()	(h)	()
(e)	()	(f)	()
(c)	()	(d)	()

問3 〰線部1は①どういうことをいうのか、②この部分は何に対比してこのようにいったものが。

C	()	B	()
A	()		()

① ()

② ()

問4 〰線部2は、どのようなことをいっているのか。

()

問5 〰線部3を連語「もぞ」に注意して現代語訳せよ。

()

問6 〰線部4の主語はだれか。

()

問7 〰線部5はどういう意味か、次から適するものを選び、符号を○で囲め。

- ア 女の心に深い印象を残す言葉
- イ 今夜のことは忘れがたいということ
- ウ 女のことを忘れにくいということ
- エ 自分を忘れては困るということ

(8) 「なとかう音もせぬ。もの言へ。さうざらうしきに」と仰せらるれば、

(9) 暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき

(10) 七夕祭るこそなまめかしけれ。

(11) 青丹あまによし奈良の都は咲く花のにはぶがごとく今盛りなり

(12) この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。

(13) そのこと果てなば、とく帰るべし。久しく居たる、いとむつかし。

(14) 廊の戸の開きたるに、やをら寄りてのぞきけり。

(15) ねびゆかむさまゆかしき人かな。

☆古語を知ることが古文の第一歩。文法事項を知っていても、古語を知らなければ意味、内容を正しくとらえることは出来ない。

演習2 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

雅房の大納言は、才かしく、よき人にて、大将にもなきさばやと思しけるころ、院の近習なる人、「ただ今あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房の卿、鷹に飼はんとて生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、疎ましく憎く思し召して、日ごろの御気色も違ひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足は、あとなき事なり。虚言は不便なれども、かかる事を聞かせ給ひて、憎ませ給ひける君の御心は、いとたふとき事なり。

大方、生けるものを殺し、痛め、鬨はしめて遊びたのしまん人は、畜生残害の類なり。万の鳥獸、小さき虫までも、心をとめて有様を見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をともし、嫉み、怒り、欲おほく、身を愛し、命を惜しめること、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりてはなはだし。彼に苦しみをあたへ、命を奪はん事、いかでか痛ましからざらん。すべて一切の有情を見て、慈悲の心ながらんは、人倫にあらず。

〔注〕院——後伏見上皇（ここは在位中のこと）。 残害——互いに

傷つけ合うこと。 一切の有情——すべての生き物。 人倫——人

類・人間。

問1 ——線部(a)～(f)の古語の意味を書け。

- (a) () (b) ()
- (c) () (d) ()
- (e) () (f) ()

問2 ——線部1・2を、それぞれ主語を入れて現代語訳せよ。

- 1 ()
- 2 ()

問3 ——線部3「さばかりの人」とはどういう人なのか。

- ()

問4 ——線部4・5を現代語訳せよ。

- 4 ()
- 5 ()

問5 この文章で作者の主張したいことはどういうことか、自分のことばで述べよ。

- ()

演習3 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

よろづのことよりも情けあるこそ、男はさくらなり、女もめでたく(A)。なげのことばなれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしきことをば「いとほし」とも、あはれなるをば「げにいかにも思ふらん」などいひけるを、伝へ聞きたるは、さし向かひていふよりもうれし。

いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがな、とつねにこそおほゆれ。

かならず思ふべき人、とふべき人は、さるべきことなれば、とり分かれしもせず。さもあるまじき人の、さしいらへをもうしろやすくしたるは、うれしきわざなり。いとやすきことなれど、さらにえあらぬことぞかし。

おほかた、心よき人の、まことにかどならぬは、男も女もありがたきことなめり。また、さる人も多かるべし。(枕草子)

〔注〕 ながのことは——ちよつとしたことは。とり分かれしもせず——他に比べて特別に喜ぶこともない。

問1 (A) に入る語はつぎのどれか、次から選び符号を○で囲め。

ア おほゆ イ おほゆる ウ おほゆれ エ おほえよ

問2 — 線部1〜6の意味はどれか、次から選び符号を○で囲め。

1 ア あつさりすべきだ イ まったくないことだ
ウ いま一步だ エ いうまでもないことだ

2 ア すばらしいと イ 祝ってやりたいと
ウ おもしろいと エ めったにない

3 ア いじらしいと イ 気の毒な
ウ 望ましいと エ りっぱな

4 ア すぐに イ あとになつてから
ウ 気やすく エ 思いもよらず

5 (ア) 欠点 イ 財産 ウ 才能 エ とげとげしき
ア かたじけない イ めったにない
ウ どうしようもない エ うれしい

6 ア かたじけない イ めったにない
ウ どうしようもない エ うれしい

問3 — 線部a「この人」とはだれか、二十字以内で書け。

問4 — 線部bはどういう意味をもつか、次から選び符号を○で囲め。

ア 私を心配してくれていたのだと、お会いしたいものだ。

イ あなたを理解したと感じてしかたがないものだ。

ウ あなたの気持ちが身にしてみたとも知らせたいものだ。

エ 私の気持ちもわかったと思われてみたいものだ。

問5 — 線部c・eを現代語訳せよ。

(c) (e)

問6 — 線部dはどういう人か、十二字以内で書け。

問7 — 線部fはだれをさすか、本文の語句を用いて「人」でまとめよ。

()

問8 この文章で筆者が言おうとしたことは何か、自分のことばでまとめよ。

()

読解編

8

物語(1)——登場人物の把握

演習1 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

故中務の宮の北の方うせたまひてののち、ちひさき君たちを引き具して、三条右大臣殿に住みたまひけり。御忌みなど過ぐしては、つひにひとりは過ぐし給ふまじかりければ、かの北の方の御おとうと丸の君を、やがてえたまはむとおほしけるを、なにかは、さもと親はらからもおほしたりけるに、いかがありけん、左兵衛の督の君、侍従にものしたまひけるころ、その御文もて来となむ聞き給ひける。さて心づきなしとやおほしけむ、もとの宮になむわたりたまひける。その時に御息所の御もとより、

なき人の巢守にだにもなるべきをいまはとかへる今日の悲しき

宮の御返し、

巢守にと思ふ心はとどむれどかひあるべくもなしとこそきけ

となむありける。

同じ右のおほい殿の御息所、帝おはしまさずなりてのち、式部卿の宮なむすみたてまつりたまうけるを、いかがありけむおはしまさざりけるころ、齋宮の御もとより、御文たてまつりたまへりけるに、御息所、おはしまさぬことなどきこえたまうて、奥に、

白山にふりにしゆきのあとたえていまはこしちの人もかよはず

となむありける。御返りあれど、本になしとあり。

〔注〕 御忌み——喪の期間。 巢守——孵化しないで巢に残っている卵の意と、あとに取り残されたものの意が掛けてある。

「白山に」の歌——「降り」に「古り」、「雪」に「行き」、「越」に「来し」の掛詞がある。 本になし——書写した原本に書いてない。

問1 右の文章で亡き人を除く登場人物をすべて書き出せ。

基本確認演習

●登場人物を的確に知ることは、主語や会話文の理解、文章全体の正しい理解につながる。

① 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

「無名といふ琵琶の御琴を上の持て渡らせ給へる、見などして、かき鳴らしなごす」といへば、弾くにはあらず、緒などを手まさぐりにして、「これが名、いかに」とかきこえさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおほえしか。淑景舎などわたり給ひて、御物語のついでに、「まろがもとにいとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へりし」とのたまふを、僧都の君の「それは隆田に賜へ。おのがもとにめでたき琴侍り。それに代へさせ給へ」と申し給ふを聞きも入れ給はで、なほことごとをのたまふに、いらへさせ奉らむとあまたび聞こえ給ふに、なほ物ものたまはねば、宮の御前の、「いなかへじとおほいたるものを」とのたまはせたる御けしきの、いみじうをかしき事ぞかぎりなき。

(枕草子)

問2 右の文章の内容として正しいものの符号を○で囲め。

ア 九の君は故中務の宮の北の方の妹である。

イ 御息所は三条右大臣の北の方である。

ウ 左兵衛の督の君と九の君とは兄妹である。

エ 故中務の宮の北の方と御息所は姉妹である。

オ この文での「親はらから」とは、故中務の宮とちひさき君たちである。

カ この文での「親はらから」とは、三条右大臣・左兵衛の督の君・御息所である。

キ この文での「親はらから」とは、右のおほいどのと御息所である。

問3 線部1は「何かは苦しからん、さもせん」の略である。この部分はどういうことをいうのか。具体的に述べよ。

問4 線部2「そ」は何を指すか。

問5 線部3・5の主語はそれぞれだれか。

問6 線部4を現代語訳せよ。

問7 「なき人の」の歌で、①「なき人」とはだれか、②「巢守」以外の掛詞を書き出せ。

①

②

問1 文章の上に出てくる人物を列記せよ。

(同一人物の重複は不要。)

☆同一人物が名前と官職名(ここでは僧官の名称)で呼ばれる(表される)場合もあるので注意。また、その人の身分・地位をばばかり、その人の住む建物で呼ばれる場合も多い。

問2 文章上に名前が出ていない人物として、だれが登場しているか、書け。

☆随筆・日記・紀行などには書き手・筆者がいるのを忘れてはいけない。

☆ここでは問題文二〜三行めの「といへば」の、言った人を見落しがちである。注意。

問3 登場人物のうち、会話と関係ない人物名を記せ。

☆会話と敬語の使い方にも注目しよう。

演習2 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

いとをかしうあはれに侍りしことは、この天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木2の枯れたりしかば、求めさせたまひしに、なにがしぬしの藏人2にて、いますがりし時4、うけたまはりて、「若き者どもは見え見知らじ。汝4求めよ」とのたまひしかば、ひと京まかり歩きしかども、侍らざりに、西の京のそこそなる家に、色濃く咲きたる木5の様体うぶだてうつくしきが侍りしを、掘りとりしかば、家あるじの、「(A)」といはせたまひしかば、あるやうこそはとて、もてまゐりてさぶらひしを、「(B)」とて御覧じければ、女の手にて書きて侍りける、

勅7なればいともかしこしうぐひすの宿はと問はばいかが答へむとありけるに、あやしく思し召して、「(C)」とたづねさせたまひければ、貫之8のぬしの御女9の住む所なりけり。「(D)」とてあまえおはしましける。繁樹こんじゅう今生こんじやうの辱号せうごうはこれや侍りけむ。さるは、「(E)」とて、衣10かづけられたりしも、からくなり11にき。
(大鏡)

△注△ 今生の辱号——生涯における恥辱の評判。

問1 この文章の場面に実際に登場している人物をすべて書き出せ。

()

問2 文中の() A～Eに適する会話文は次のどれか、()に符号を記入せよ。

- ア 遺恨のわざをもしたりけるかな。
- イ いかなるゆゑぞ。

ウ 何物の家ぞ。

エ 木にこれ結びつけて持てまられ。

オ 思ふやうなる木持てまゐりたり。

カ 心づきなきことを言ふかな。

キ なにぞ。

問3 — 線部1・4・5・8・11の主語を答えよ。
A () B () C () D () E ()

1 () 4 () 5 () 8 () 11 ()

問4 — 線部2「いますがり」とは文法的にどういう語か。

()

問5 — 線部3は何を「見知らじ」なのか、次から適するものを選び符号を○で囲め。

- ア 清涼殿の枯れた梅の木
- イ 京の中で梅の木のある所
- ウ 貫之のぬしの御女
- エ 梅の枝ぶりのよしあし

問6 — 線部6の下には「あらめ」が省略されている。これを含めてこの部分を現代語訳せよ。

()

問7 — 線部7について、①「うぐひすの」はどの語句にかかるか、

読解編

14

日記・紀行(1)——主語・述語の関係

演習1 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

——一条天皇の中宮彰子が父の藤原道長の邸で皇子を生んだ。以下はその後のことである。——
 十月十余日^{よか}までも、御帳^{みろやう}いでさせた¹たまはず。西のそばなる御座^{おまし}に、夜も昼もさぶらふ。殿の、夜中にも暁にもまゐりたまひつつ、御乳母^{みめのと}のふところをひきさがさせた²まふに、うちとけて寝たる時などは、何心もなくおぼほれておどろくも、いといとほしく見ゆ。心もとなき御ほどを、わが心をやりてささげうつくしみたまふも、ことわりにめでたし。ある時は、わりなきわざし⁴かけたてまつりたまへるを、御紐^{ひも}ひきときて、御几帳^{ひしやう}のうしろにてあぶらせた³まふ。「あはれ、この宮の御しとに濡るるは、うれしきわざかな。この濡れたるあぶるこそ、思ふやうなる心地すれ」と、よろこばせた⁵まふ。中務^{なかつか}の宮わたりの御ことを、御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼして、かたらはせた⁶まふも、まことに心のうちは、思ひみるることおほかり。
 (紫式部日記)

問1 ——線部1・2・3・4・5・7の主語はだれか。

1 () 2 () 3 ()
 4 () 5 () 7 ()

問2 ——線部の述部を指摘せよ。述部が複数ある場合は、すべてを書き抜け。

基本確認演習

1 次の各文の主語(部)と述語(部)の関係をとらえ、——線部の述語(部)に対する

- 主語(部)を——で記せ。
- 雀の子を犬君がにがしつる。
 - 雪のふりたるは言ふべきにもあらず。
 - 憶良らは今はまからむ子泣くらむ
 そのかの母もあを待つらむぞ
 - 白波の浜松が枝の手向け草
 幾代までにか年の経ぬらむ
 - 女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中
 に、いとやむごとなききはあらぬが、
 すぐれて時めき給ふありけり。
 - 我が入らむとする道は、いと暗う細きに、
 つた、かへでは茂り、物心細く、す
 ずろなる目を見ることと思ふに修行者会

演習2 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

雨うちふりていとつれづれなる日ごろ、女はくもまなきながめに、世のなかをいかになりぬるならむとつきせずながめて、すぎごとする人々はあまたあれど、ただ今とはかくもおもはぬを、世の人はさまざまにいふれど、身のあればこそとおもひてすぐす。宮より「雨のつれづれはいかに」とて、

A おほかたにさみだるとやおもふらむ君恋ひわたるけふのながめを
とあれば、折を過ぐしたまはぬををかしとおもふ。あはれなる折しもおもひて、

B しのぶらむものとも知らでおのがただ身を知る雨とおもひけるかな
と書きて、紙のひとへをひき返して、

C ふれば世のいとどさのみ知らるるにけふのながめに水まさらなむ

D なにせむに身をさへすてむとおもふらむあめの下には君のみやふる
①「と聞こえたるを御覧じて、たちかへり、

②「とあり。

③五月五日になりぬ。雨なほやまず。一日の御かへりのつねよりものおもひたるさまなりしを、あはれとおほし出でて、いたうふり明かしたるつとめて、「こよひのあめの音は、おどろおどろしかりつるを」などのたまはせれば、

E よもすがらなにごとをかはおもひつる窓うつ雨の音を聞きつつ

かげにゐながらあやしきまでなむ」と聞えさせれば、なほいふかなくはあらずかしとおほして、御かへり、

F われもさぞおもひやりつる
③をさせるつまなきやどはいかにと

昼つかた、川の水まさりたりとて人々見る。宮も御覧じて、「ただ今いかが。水見になむいきはべる。

G おほ水の岸つきたるにくらぶれどふかき心はわれぞまされる
④「とあり。御返し、

H 今はよもきしもせじかしおほ水のふかき心は川と見せつつ
⑤「と聞えさせたり。

〔注〕宮——敦道親王。

(和泉式部日記)

問1 ——線部1・3・8にあてるのに適当な漢字を書け。

1 () 3 ()

8 ()

問2 ——線部2を現代語訳せよ。

() ()

問3 ——線部③④の「思ふ」には、一つだけ他のものと主体が違うものがある。それはどれか。符号で答えよ。

() ()

問4 — 線部4の意味として適当なものを次の中から選び、符号を○で囲め。

- ア 機会をのがしてしまわれた。
- イ 約束の時間にお遅れにならない。
- ウ 頃合いを逸されない。

エ 折節の情趣をお見すごしにならない。

問5 — 線部5の内容を表す部分をAの歌から書き抜け。

問6 ①・②・④・⑤に入れるのに、最も適当と思われるものを、それぞれ選び、符号で答えよ。

- ア さは知りたまへりや
- イ まちとる岸や
- ウ かひなくなむ
- エ たれもうき世や

①
②
④
⑤

問7 — 線部6「ふる」は掛詞である。何と何とがかけられているか、漢字で答えよ。

問8 — 線部7の意味として適当なものを次の中から選び、符号を○で囲め。

- ア 無気味で背筋がこおるようであった。
- イ 人の心をいらだたせるようだった。
- ウ 騒がしい程であった。
- エ しとしとと陰鬱であった。

問9 — 線部9を解釈せよ。

問10 ③には、Eの歌で用いられている語句が入る。それは何か、書き抜け。

問11 — 線部10「くらぶれど」とあるが何と何を比べるのか。簡潔に答えよ。

問12 — 線部11を現代語訳せよ。

問13 本文中の和歌A-Hの中に女からの歌が四首ある。それはどれか、符号で答えよ。

問14 本文の内容にあうものを次の中から一つ選び、符号を○で囲め。

- ア 大水で困っている女の元へ、宮はどうとう訪ねて来なかった。
- イ 大水が出て女の家が流されたので、宮は歌で励ました。
- ウ 宮からの歌を読み、女は宮の深い心を知り思いが強まった。
- エ 雨に降りこめられた二人は大水で流されぬかと不安だった。
- オ 降り続けるさみだれの中で女は物思いにふけていた。

読解編

18

評論(1)——段落と要旨

演習1 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

そもそも人のしるし置けるふみなどを、そのきずを求め出でてそしりおとしめ、わがさかしさを人にほこらんとかまふることは、世のえせものの癖にて、そは人の名高きがねたさに、あながちにまけじとするわざなれば、しひごとの多かるならひにて、人をあばきいはいはむとて、かへりてわが名をくたす類もおほかめり。いまおのがものし侍ることは、さるえせものまねするやうなるわざに侍れど、これには深く思ふ所なむ侍りける。あがたるの翁が教へをうけて、その学びの心をつぎたる人これかれ侍れど、古言のまなびにくはしきことは、鈴の屋のあるじこそひとりすぐれたれ。翁のおもひ残されしふしをも、考えあきらめたるたぐひ多くて、この人いにて後、この学びの道そなはりぬるは、いみじきさをにて、まことに藍よりも青しとせむこと、いへばさらなり。かくていまは世に名高くて、たふとみしたがふ人も多かるは、いとよるこばしきことなるを、ただその歌のあげつらひは、いたくひが心得のみ侍るこそをしけれ。さるはなほなほしききはの人なりなましかば、さてもありぬべきを、しかすぐれたる人のひがごといはむは、人のまどふべきわざにて、かつはあがたるの歌のをしへも、この人によりてつひにかくれぬべければ、いまそのひがごとを改めことわりて、初学びの人などの、あらぬかたにふみまよはざらむ道しるべにもと思ひとり侍れば、おのがまだしう愚かなるをも忘れて、なすわざになむ侍りける。

〔注〕 鈴の屋のあるじ——本居宣長。 いみじきさを——大功績。 あげつらひ——論議。

(琴後集)

問1 右の古文を二段に分けるとすればどこで分けるか。前段の終わりの四字を記せ。

--	--	--	--

基本確認演習

●段落を切る場合は、話題・場所・時間の転換した所や接続詞に注目して判断する。

① 次の古文を三段に分け、第一段と第二段について①その終わりの各三字と、②要旨を各十字以内で書け。

今これらの事共を思ふに、昔わが三歳なりし時より、物書くことを知れる初めに、しかるべき師といふものもありなむには、かく書に拙き身にもあらじ。また、六歳の時より、詩を誦じ習ひしことなどありし時より、従ひ学ぶところもすこしくすすむ事もありなまし。まして十七の時に、斯道に志せし時より、教へ導く人もありなむには、今のわれにもあらじ。わが藩邸に仕へまるらせし後に至りてこそ、みづからも書籍をもとめ、賜はりしところも多くはなりたれ。されど身すでに仕へに從ひしかば、書を見るべきいとまもあらず。これよりさきには、身常に貧しくして、しかるべき書どもをば、人に借り求めて見もし、また、記しもおくべきものどもをば、手づか

演習2

次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

問ひて曰く、「^いこののおもむきはおろおろ心得はべりぬ。その幽玄とかいふらん体に至りてこそ、いかなるべしとも心得がたく侍れ。そのやうをうけたまはらん」といふ。答へて曰く、「すべて歌の姿は心得にくきことにこそ。古き口伝、^く髓脳などにも、かたきことどもをば、手を取りて教ふばかりに積したれども、姿に至りては、確かに見えたることなし。いはんや幽玄の体、まづ名を聞くよりまどひぬべし。みづからもいと心得ぬことなれば、さだかにいかに申すべしともおぼえ侍らねど、よく境に入れる人々の申されしおもむきは、^せ詮はただ詞にあらはれぬ余情、姿に見えぬ景気なるべし。心にも^こ理深く、詞にも^せ艶きはまりぬれば、これらの徳はおのづから備はるにこそ。たとへば、秋の夕暮れ空の景色は、色もなく、声もなし。いづくにいかなるゆるあるべしともおぼえねど、^すすずろに涙こぼるごとし。これを心なきものは、^いさらにいみじと思はず、ただ目に見ゆる花・紅葉をぞめではべる。また、よき女の、恨めしきことあれど、詞にはあらはさず、深く忍びたる気色を、『^ささよ』などほのぼの見つけたるは、^詞詞を尽くして恨み、袖をしぼりて見せんよりも、心苦しう、あはれ深かるべきがごとし。また、をさなきものなどは、こまごまと言はすよりほかは、いかでかは気色を見て知らん。この二つのたとへにぞ、風情すくなく、心浅からん人の、さとりがたきことをば知りぬべき。」

(無名抄)

〔注〕 口伝、髓脳——どちらも奥義・秘伝を述べた書物。 境に入れ

る人々——歌の真髓を理解している人々。 詮は——結局は。 景

気——情趣。歌に詠まれた対象のもつ雰囲気という。

心にも理深く——感動も人の心に根ざした深いもので。 艶——優美
 さ。 徳——美点。長所。 さよ——そうだったなあ。

問1 この古文を内容からみて三つに切った場合、①第二段、②第三段はどこから始まるか、それぞれ最初の三字を示せ。

①

 ②

問2 幽玄体について、作者が最も端的に説明している部分を二十字以内で書き出して示せ。

問3 ———線部1を現代語訳せよ。

問4 ———線部2は、①「よき女」がどういう態度・様子を示し、②それを見る「よく境に入れる人々」はどう感じるというのか、説明せよ。

①

--

②

--

演習3 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

大かた世の常にことなる、新しき説をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一¹わたりは、世の中の学者にくまれてそしらるるものなり。あるはおのがもとより来つる説と、いたく異なるを聞きては、よきあしきを味はひ考ふるまでもなく、始めよりひたぶるにすてて、とりあげざる者もあり。あるは心のうちには、げ²にと思ふしもおほくあるものから、さすがに近き人のことにしたがむことのねたくて、よしともあしともいはず、ただうけぬかほして過ぐすたぐひもあり。あるはねたむ心のすすめるは、心にはよしと思ひながら、その中の疵³をあながちに求め出て、すべてをいひけたむとかまふる者もあり。大かたふるき説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わづかに二つ三つのとるべき所のあるをとりたてて、力のかぎり助け用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことをいひたてて、八つ九つ⁴のよきことをも、おしけちて、力のかぎりは、我も用ひず、人にも用ひさせじとする、こは大かたの学者のならひなり。然れども又まれまれには、新たなる説のよきを聞きては、ふるきがあしきことをさとりて、すみやかに改めしがふたぐひも、なきにはあらず。ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらしかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑⁴はしながら、さてあるなどは、あらたなるよき説をききては、かくてこそはと、いみじくよろこびつつ、たちまちにしたがふたぐひも有りかし。

△注▽ いひけたむ——否定しよう。
(玉勝問)

問1 右の文章を四つの段落に分ける場合、①第二段、②第三段、③

第四段それぞれの最初の四字を書き出して示せ。

③	①
	②

問2 文中には新説に対する学者の態度が四例みられる。次からその四例を選び、それがどの順番で述べられているかを符号で答えよ。

- ア すぐに肯定し即座に従う イ ためらうものの肯定する
ウ 肯定しながらも黙殺する エ 無条件に全く否定する
オ 作為的に全面否定する カ 判断力を欠き黙認する

1 () 2 () 3 () 4 ()

問3 新しい説を否定しようとする学者たちに見られる一般的傾向を述べよ。

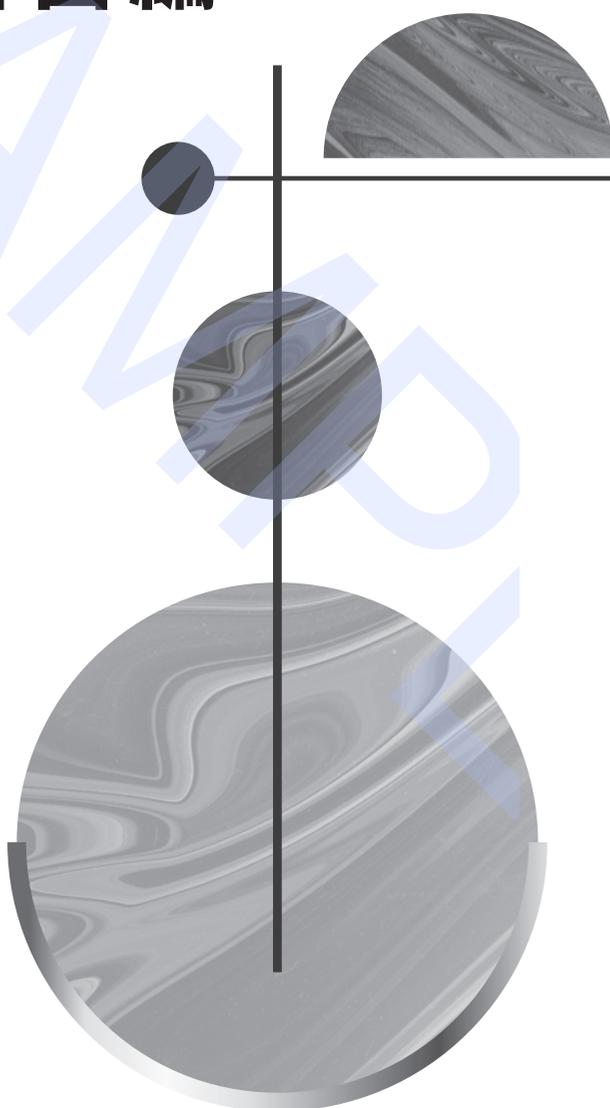
問4 線部1〜4の意味はどれか、次から選び符号を○で囲め。

- | | | | | | |
|---------------|----------------|-------|----------------|---------------|---------------|
| 4 | 3 | 2 | 1 | | |
| ア | ウ | イ | エ | オ | カ |
| 疑いながらもそう信じている | 疑うと同時に新説を待っている | 疑いながら | 疑うと同時に新説を待っている | 自分が以前から従っていた説 | 自分が最初に提唱してきた説 |
| そのままでいる | 疑うと同時に新説を待っている | 疑いながら | 疑うと同時に新説を待っている | 自分が以前から従っていた説 | 自分が最初に提唱してきた説 |

高校ゼミ
Essence

古文Ⅲ

解答編



① 重要古語(1)

古今異義語・対義語・多義語

P 455

- 1 (1) おいしい・残念である (2) いとおしい (3) たくさん・数多く
(4) 奥ゆかしい (5) 物思いにふける (6) じつと見つめる・見守る

- 2 (1) ① イ ② ア (2) ① イ ② ア (3) ① イ ② ア

- 3 (1) ① エ ② ア ③ イ ④ ウ (2) ① ウ ② イ ③ ア
④ エ (3) ① ウ ② ア ③ イ

〔解説〕

1 は古今異義語である。「あさまし・あそぶ・あやし・いそぐ・さながら・すさまじ・なまめかし・むつかし・やさし・ゆかし」など注意しよう。2 は対義語である。対にして覚えよう。3 は多義語。それぞれの文により適する意味を選び分けなければいけない。

〔現代語訳〕

1 (1) 若くして死んでしまったことは、気の毒であるし残念なことである。(2) 翁を気の毒だ、いとおしいと思っていた気持ちもなくなってしまった。(3) だれを待つ松虫がたくさん鳴いているのだから。(4) 上品で奥ゆかしい人ではないだろう。(5) 二年ほど古い御殿で物思いに沈んでいらつしやつて、(6) (牛車の)下簾したすだれの隙間の開いている所から、この男が(車の中を)じつと見つめると、

- 2 (1) ① 忠実な(家来の)男たちを二十人ほど派遣して、② ほんのちよつと言ひ(詠み)捨てられたつまらないと思うような即興的な歌でも、(2) ① ほんとうに頼りなくいらつしやるのが気がかりです。② まじめでいらつしやるお方なので、安心だと思ひになつて(姫君を)おまかせしていた。(3) ① 中途半端な宮仕えが似つかわしくなく、(将来の)わが身を思い悩んで、② 滝口の武士なので、弓弦をたいそうふさわしく鳴らして、(4) ① 気のきく少将の尼と、年輩で分別のある女房、女童だけを、② 帝は今年三歳、まだ幼くいらつしやつたので、(5) ① たびたび行つたけれども、たいそうぶあいそうに扱つて、② 髪はゆつたりととても長く、感じのよい人である。

- 3 (1) ① このようなことは書物にも見あたらないし、(昔の人の)伝えた教えにもない。(徒然草) ② 都に(いる)、あの人の御もとに(やる)

というわけで、手紙を書いて託した。(伊勢物語) ③ (梨の花を)中国ではこのうえもない(すばらしい)ものとして、漢詩文にも(詠み)作る(枕草子) ④ (人として身につけることが)望ましいことは、本格的な学問の道、(徒然草) (2) ① 梳かくことをいやがりなさるけれども、美しいお髪ですよ。(源氏物語) ② (着物の)裾すそをこっけいなくこうにはしよつて、道案内(をしよう)とうきうきしてでかける。(奥の細道) ③ (螢が)ほのかに光つて行くのも風情がある。(枕草子) ④ (猫は)たいそうかわいいので、大切に世話をおさせになる。(枕草子) (3) ① しかるべきてづるを見つけて、七月七日に言い贈る。(更級日記) ② ついでがあるたびに、贈り物もいつも取らせていた。(土佐日記) ③ 庭の草木も趣ある様子であつて、簀子と透垣との配置も趣があり、(徒然草)

② 重要古語(2)

同音異義語・混同しや
すい語・慣用句

P 657

- 1 (1) ① イ ② ア (2) ① イ ② ア (3) ① ア ② イ (4) ① イ ② ア (5) ① 振 ② 触 ③ 古・旧 ④ 震 (6) ① 駆 ② 掛・懸 ③ 搔 ④ 欠

- 2 (1) おもしろくない (2) 張り合いがない (3) さあどうだか(知らない) (4) さあ (5) なんともいえないりつばな (6) どうしても避けることができない (7) 上品だ (8) 騒がしい

- 3 (1) 言葉でいい表せない (2) そのとおりである (3) 言うまでもない (4) そのままにしておくわけにもいかない (5) 適当である (6) 比べるものがない (7) 悪くすると

〔解説〕

1 同音異義語である。(1) (4) は語の意味と文意を考えてあてはめる。(5) (6) は文意から漢字を求める。いずれも古語辞典で確かめよう。2

は混同しやすい古語、3 は慣用句である。これも辞典で確かめておこう。

〔現代語訳〕

1 (1) ① おそれおおい(帝の)お言葉をたびたび承りながら、

- ② (右大弁も)たいそう学問のある物知りであつて、(2) ① 悲田院の売連上人は……並ぶものがないくらいすぐれた武士である。(2) ① どうしてこれほどの宝物を、簡単に彫はらすことができようか(いや、できないのだ)。(3) ① 道も避けることができないくらいに(桜の)花が散つてい

も趣深いものだ。(徒然草) (3) 物の情趣を感じる心のない出家した身であつても、しみじみとした鳴の飛び立つ沢の秋の夕暮れの情趣はおのずから知れる所であつた。(新古今集) (4) ほめたてられて、感情が高ぶつてしまふとそのまま尼になつてしまふよ。(源氏物語)

④ 副詞・連体詞・接続詞・感動詞

P 10 ~ 11

- 1 (1) やうやう→なりゆく・少し→あかりて (2) のつと→出る
 (3) ただ→ひとり (4) うらうらと→照りたる
 (5) さらに→知らせず

- 2 (1) オ (2) エ (3) ア (4) ウ (5) キ (6) イ

〔解説〕 1は副詞とその修飾する語の指摘である。副詞は自立語で活用はなく、下にくる被修飾語(主として用言)の意味を詳しく説明したり、限定したりする語であることを知ろう。(3)は副詞が名詞を修飾する例であり、「かねてのあらまし、みな違ひゆくかと思ふに」(徒然草)のように、「」を伴つて体言を修飾することもある。また、「いとどなよなよと、われかの気色にて」(源氏物語)のように副詞が副詞を修飾することもある。2は陳述の副詞(呼応の副詞)で、どの副詞がどういう表現を下に要求するかは、慣れて知つておくべきである。

〔現代語訳〕

- 1 (1) だんだんと白くなつてゆく山際が少し赤みがかつて、
 (2) 早春の山路を歩いていると、朝もやの中にほのかに梅の香がただよつている。折しもその朝もやの中からぬつと朝日が昇つて来た。
 (3) ただ一人で、徒歩で参詣した。
 (4) 三月三日は、うららかにのんびりと日の照っている(のがよい)。
 (5) だれであるとは、まったく家の中の人にさえ知らせません。
 2 (1) 心に願つたことは少しも叶わぬことよ。
 (2) 当然まずその心がけを学びとらなくてはならない。
 (3) 轟の滝は、どんなにかやかましく恐ろしいことであろう。
 (4) まるで四条五条の橋のようだ。
 (5) このようなことは決して人に言つてはいけない。
 (6) 笑つたり軽んじる人もまさかいるまい。

- 3 (1) さらに(接続詞)→順接 (2) されど(接続詞)→逆接 (3) しかも(接続詞)→添加 (4) そもそも(接続詞)→話題の転換 (5) さりとて(接続詞)

↓逆接 (6) あはれ(感動詞)→感動 (7) しかしか(感動詞)→応答

〔解説〕

入試などで問題となるのは接続詞では順接・逆接であろう。連体詞と感動詞の出題はきわめてまれであるが、「ある」(動詞か連体詞か)と「あはれ」(感動詞か形容動詞の語幹用法か)ぐらゐに注意しよう。

〔現代語訳〕

- (1) 和歌を一首ずつお作り申しあげなさい。そうすれば許してあげよう。
 (2) 腰が動かせない。けれども子安貝をすつと握り持つているので、
 (3) 流れゆく川の流れば絶えることがなくして、そのうえ、(その流れている水は)もとの水ではない。
 (4) それにしても参詣した人のだれもが山へ登つたのは、(山の上に)どんな事があったのだろうか、
 (5) そうかといつて、作りあげるのを待つて寝ないでいるようなものもきつとよくないだろうと思つて、
 (6) そのあたり一帯がみな荒れてしまつているので、ああ(ひどい)と人々は言う。
 (7) そうそう、そのようございしましたことです。

⑤ 用言(1)——動詞の活用と活用の種類

P 12 ~ 13

- 1 A 寄する われ くだけ さげ 散る B きゆる 立ちさら 住みはつる

〔現代語訳〕

A 大海の磯もどうどろくばかりに寄せる波が(岩に当たつて)割れて砕けて裂けて(しぶきとなつて)散ることだよ。(金槐集) B あだし野の露が消える時がなく、鳥部山の煙が立ち去らないで(人が死ぬことなくずっと)生き続ける習わしならば、どんなにか物の情趣もないであろう。(徒然草)

- 2 ① 未然形 ② 已然形 ③ 命令形 ④ 未然形 ⑤ 連体形 ⑥ 連体形 ⑦ 連体形 ⑧ 未然形 ⑨ 連用形 ⑩ 連体形 ⑪ 終止形
 〔解説〕 基本形から活用を考えよう。①・③ しる ② いふ ④ おこす ⑤ 見る ⑥ かはる ⑦ あらはる ⑧ かへりみる ⑨ まかす ⑩ いひちらす ⑪ きこゆ (③を已然形とする説もある。↓20ページ)

〔現代語訳〕

諸道の達人のすばらしい事など、頑固でその道に通じていない人は、むやみと神様のようにいうけれども、その道を心得ている人は、

そんな話を聞いても、一向に信ずる気を起こさない。噂に聞くのと実際に見る時とは、何事でも違うものである。一方話すそばから、それが嘘だとばれるのも構わず、口から出まかせに言いちらす虚言は、すぐに根拠のない事だとわかる。

- 3 ① ラ変・連用形 ② 下二段・連用形 ③ 四段・連用形 ④ 下二段・連用形 ⑤ ナ変・未然形 ⑥ 四段・連用形 ⑦ 下二段・連用形 ⑧ ナ変・未然形 ⑨ サ変・未然形 ⑩ 四段・未然形 ⑪ ナ変・連用形

(解説) ナ変やラ変に活用する動詞は限られたものしかない。活用のしかたとともに暗記しよう。

(現代語訳) 昔、男と女がたいそう深く思いあつていて、他の人に心を移すようなことはなかった。それなのにどうした事情があつたのであろうか。ほんのちよつとしたことが原因で、(女は)二人の仲をおもしろくなく思つて(男のもとを)出ていこうと思つてこのような歌をよんで、ものに書きつけた。

私がこうして出てゆきましたならば、人々は私のことを心の軽い女だといふのでしょうか。私たち二人の間の事情を人々は知らないのですから。とよんでおいて、(女は)出て行つてしまった。

- 4 ① ① 死な ② せ ② ③ 去ぬる ③ ④ あれ ④ ⑤ 受けよ ⑤ ⑥ 過ぐれ

(現代語訳) (1) 生命がなくなるならば、どうしようか(どうしようもない)。(平家物語) (2) 去る一日の日の夢に、(源氏物語) (3) やはり住む人がいるからなのであろう。(徒然草) (4) 会つて受け取れ。(古本説話集) (5) (そこを)通り過ぎると、遠く広く続いている浜に出た。(蜻蛉日記)

- 5 ① き ② こ ③ こ ④ く ⑤ く

(解説) カ変の活用のしかたを暗記しよう。

(現代語訳) (1) 手の中に入れて家に持つてきた。(2) 散りゆく花は、再びめぐりくる春には見ることもできよう。(3) 「早くおいで」と言いやうつた。(4) 夏が終わつてしまつてから、秋が来るのではない。(5) 春

が来るので雁は(北の国へ)帰るのである。

⑥ 用言(2) — 動詞の種類と用法

P 14 ~ 15

- 1 ① イ音便・はづし 撥音便・進み ② ウ音便・ふるまひ ③ ウ音便・負ひ イ音便・抱き

(現代語訳) (1) 大長刀のさやをはずして、ただ一人で橋の上に進んでいった。(2) 浄妙坊の気持ちとしては、一条や二条の大路のようにふるまっていた。(3) 重いものを背負つたり、抱いたりして海に入ったので皆沈んでしまった。(用例はすべて「平家物語」)

- 2 ① 四段・自動詞 ② 上一段・他動詞 ③ 四段・他動詞 ④ 下二段・自動詞

(現代語訳) (1) 東の野に曙の光が立っているのが見えて、ふりかえつて見ると空の月は西にかたむいてしまつてのことだ。(2) 自分の身を助けようとするならば、恥をかまわないうで、(3) この児は、きつと起こしてくれるだろうと、じつと待つていたところ、(4) 夫婦となつたからには、お互いの心をつつにしておかし合ひ、流れる川の水が中洲にせかれて分かれてもまた一つになるように、絶えることはあるまいと思ふことだ。

3 ① 悪人のまねといつて人を殺すならば、悪人である。(2) 四日、嵐が吹くので、出航することができない。(3) 境の垣根はあるけれども、一つの家のようなので、(4) お見捨て申しあげて帰つていく空からも、落ちてしまふような気持ちですすよ。

(解説) (1) 順接の仮定条件で訳す。(2) 順接の確定条件で訳す。(3)

「こそ+已然形(あれ、……)」の形に注目。逆接で下へ続くのである。(4) 文の終止がサ変の連体形である。係り結びの法則ではない。

- 4 ① 奉る ② 聞こえ・給は ③ 侍る ④ 候ひ・侍ら ⑤ おはしまし・給へ

(解説) 動詞として本来の意味を持つかどうかを考える。(2)の「聞こゆ」は、耳に聞こえるのだろうか、「給ふ」は、与えるのだろうか。それで判断する。

と烟^けって鳥海山も隠れている。(3) 上品なもの、…梅の花に雪が降りかかっているの。(4) 船も出さないうでひまなので、ある人が詠んだ(歌)、(5) 高く険しい山岳から、百尺の滝の流れがみなぎり落ちている。(6) 和泉の国まで(無事に行けるように)と、心静かに願を立てる。

2 (1) 十五夜の上ったばかりの名月が白く^やえて、涼風がさあつと吹いた夜半に、(2) 桜は真盛りだけを、月はかけりのないところだけを見るものだろうか(そうではないのだ)。(3) 曇った空をしんみりと物思いに耽^かって見つめて暮らしたのは、たいそうしみじみと心うたれる。(4) 最後まで大路を走り歩いたことがない。(5) 人の心は正直ではないので、うそがないわけではない。(6) 財産が(たくさん)あると心配事が多く、貧しいと(身の不幸を)うらむことがはなはだしい。(7) (出家をして)喜怒哀楽の心から離れた私にも、しみじみとした情趣は自然とわかることだよ。この鳴の飛び立つ沢の秋の夕暮れの情趣は。(8) 女盛りになれば、顔かたちもこの上なくよくなり、髪もきつとたいそう長くなるだろう。(9) 舍人たちまでが優美な服装をこのうえなくこらして、(10) 清盛は嫡男(家を継ぐ男)であることによって、その跡を継ぐ。

3 (1) ああいたましや、斎藤別当でございますよ。(2) なみなみならぬ願によってであろうか、風も吹かず、すばらしい太陽が出て来て、(3) 立石寺のある山全体がひっそりと静まっている。その中で鳴く蟬の声は澄みきって、あたりの岩の中にしみ入るように感じられる。

㊦ 助動詞 (1)

「つ・ぬ・たり・り・き・けり」の意味と活用

P 20 ~ 21

- 1 (1) 連体形・完了 (2) 未然形・強意(確述) (3) ア 終止形・完了
イ 終止形・強意 (4) ア 連体形・過去 イ 已然形・過去 (5) 終止形・詠嘆 (6) ア 連用形・完了 イ 終止形・過去 (7) 命令形・強意(確述)

(解説) 活用形は上段の活用のしかたを見よう。(2) 「つ」の未然形と連用形は同じ「て」であるが、こういう場合は下の語との関係で判断する。助動詞「む」は未然形接続であるので、ここは未然形なのである。(3) イは

「ぬべし」の形である。(5) 和歌の「けり」は詠嘆ととらう。また、詠嘆の「けり」は会話文にもよく見られることも知っておこう。

(現代語訳) (1) 「雀の子を犬君(童の名)が逃がしてしまったの。」(2) 翁が申しあげることがは(きつと) お聞きになってくださいますか。(3) 潮が満ちた。風もきつと吹いてくるだろう。(4) 礼儀正しく言ったのは、りっぱだと思われた。(5) (遠くから都を) 見渡してみると、(あちこちに) 柳(の緑)と桜(の花の色)をませあわせていて、都は錦のような(美しい)春の景色であるよ。(6) 乾飯の上に涙を落として(その涙で乾飯が)ふやけてしまった。(7) だれか一人と結婚申しあげなさってください。「一人一人」は、いずれか一人の意。「あふ」は結婚すること。」

2 (1) る (2) たれ (3) たら (4) ら (5) たる (6) れ

(解説) 「たり」と「り」のどちらが該当するかは、「たり」(連用形接続)と「り」(四段の命令形・サ変の未然形接続)の接続で判断する。つまり上の語の活用形を知ることである。適する活用形は、文末は終止形か係り結びの結びの語形である。(2)・(6)は「こそ」が上にあるので已然形。体言の上にある(1)・(5)は、体言に連なる形が来る。(3)・(4)は下の助動詞の接続で判断する。「まし」も「ず」も未然形接続であった。

(現代語訳) (1) 道を知っている人もいないので、迷いながら行った。(2) 陰陽師(天文や暦や占いにたずさわる人)のところにいる少年は非常によくものを知っているものだ。(3) 稲荷神社にお参りしていたならば、こんな(不幸な身)ではなかっただろうに。(4) 船頭は船唄を歌って何とも思っていない。(5) ふだんよりも物思いにふけっている様子だ。(6) 散りやすいと評判になっていきますけれども、桜の花は一年のうちにたまにしか現れない方をも(このとおりきれいに咲いて、ちゃんと)待っているのですよ。

3 (1) A 過去の助動詞「けり」の已然形(「こそ」の結び)。 B 形容詞「おもしろし」の已然形活用語尾。(2) A 下二段活用の動詞「求む」の連体形活用語尾の一部。 B 存続の助動詞「り」の連体形。(3) A 形容動詞「ほのかなり」の連用形活用語尾。 B 完了の助動詞「ぬ」の連用形。 C 副詞「つひに」の一部。(4) A サ変動詞の連用形。 B

過去の助動詞「き」の連体形。(5) A 詠嘆の助動詞「けり」の終止形の一部。 B 完了の助動詞「り」の終止形。

(解説) 語の識別にあたっては、まず上の語は何かを考える。そして、下の語との接続や連なり方を確かめるのである。(1) B・(2) A・(3) Aなどを助動詞だと思おうようでは失格。助動詞は上下の続き具合でまずどの助動詞かを判断し、文の内容からその意味も確認しないといけない。

(現代語訳) (1) A あそこに女性がいた。 B 神楽は優雅なものであり、興味ぶかいものである。(2) A はなやかで美しいものを求めているならぬ。 B 四十年余の年月をおくっているあいだに、(3) A (蛍が)ただ一つ二つなどかすかに光って行くのも趣ふかい。 B その人は、姿もお見えにならなくなりました。(4) A 一日中あれこれしながら騒いでいるうちに、夜もふけてしまった。「日しきりに」は「ひねもすに」と同じ意味。」 B 簾をおろして家にとじこもっていて春の移り変わりも知らないでいるうちに、「見に行こうと咲くのを」待っていた桜も散ってしまったことだよ。(5) A 私の家の池の(ほとりの) 藤の花は咲いたことだよ。 B 顔は(泣いたらしく) たいそう赤くこすつ(た顔を)して立っている。

10 助動詞 (2)

「む・むず・べし・じ・まじ」の意味と活用

P 225 23

1 (1) 推量 (2) 適當 (3) ア 婉曲 イ 婉曲 (4) 推量 (5) 意志 (6) 適當 (7) 当然 (8) 可能

(解説) 同じ助動詞の意味を識別するときは、その助動詞の意味を暗記していることを前提に、まず上記ポイントに書いた特徴を思い浮かべる。次いで、文の内容を考えてふさわしい意味をとるのである。(2)は適當と当然、(3)イは仮定と婉曲、(6)は適當と可能、(7)は当然と義務と迷うだろうが、どちらがよりよいか、現代語訳を通してつかむのである。

(現代語訳)

(1) 実用的なものばかりとよくないでしょう。(2) どうしてこのようにお急ぎになるのですか。桜を見てお帰りになるのがよろしくございます。(3) かわいと思う(ような) 子を法師にしている(よう

な)人は痛ましいことだ。「イを仮定にとれば「法師にしたとしたら」の訳となる」(4) 世の中が治まりましたならば、勅撰集を選べという仰せがございましょう。(5) それでは、鷹を飼わないで、どうなさるおつもりですか。(6) 東国の方に住むにふさわしい所を求めにと思ってでかけて行った。(7) 子どもとおなりになるはずの人のだろう。(8) 自分の子どもが、影を踏むことさえできないのが、残念なことだ。

2 (1) 人目を避けてぜひ御参内なさいませんか。(2) あの元の国から(私を)迎えに人々がやって来るでしょう。(3) 我こそはと思う(ような)人は高綱に組めよ。(4) (私は)命を限りに戦おうから(戦うつつもりだから)、生きて再び帰ることは決してあるまい。(5) 帝のお使いを、どうして疎略に扱えましょうか。(6) 羽がないので空を飛ぶこともできない。(7) 舟に乗る予定の所へ移る。(8) 人から贈られた歌の返歌は早くしなければならぬのに、うまく詠むことができないその間もじれつたいものだ。

(解説) (1)は勧誘、(2)は推量、(3)は婉曲、(4)は意志、(5)も意志、(6)は可能、(7)は予定、(8)は当然、義務ととってもよい。

3 (1) ウ (2) イ (3) ア (4) エ
(解説) 同じ助動詞の意味の違いは、文の内容をよく考えて選択することである。

(現代語訳) (1) 西国の遊女はこのようにはできない!!うまく歌えないだろう。(2) 京にはいるまい、東国の方に住むにふさわしい国を探しに行こう)と思っ出て出かけて行った。(3) ものうらやみはしてはいけないことだとか(いうことである)。(4) 止めることができないので、ただ(かぐや姫を)仰ぎ見て泣いている。

4 ア エとも現代語訳参照。

(解説) アでは「じ」(打消意志)、イでは「な」(強意の「ぬ」の未然形)と「んず」(意志)、ウの「かは」(反語)、エでは「死に給ふべき」(当然)と反語の「や」、「あるべき」(当然)の意味と訳し方に注意する。

(現代語訳) かぐや姫が答えていることに、「決して、そのような宮仕えはいたしませんまい、と思うのに、無理に(宮仕えを)おさせになるならば(私

2 (1) (1) たら (2) たる (3) に (4) なれ (2)は現代語訳参照。

(解説) ①の活用形は下の語との関係でつかもう。(1)の下の「ん(む)」は未然形接続だから、上は「たら」となる。(2)の下は体言、体言に連なる形が答えである。(3)の下の「か」はいろいろな語につくので少しむずかしいが、「か」がない(疑問文ではない)ものとして考えてみるとよい。(4)は「ども」に続いていいるから已然形である。

(現代語訳) (1) 帝に逆らうことは、どうして臣下のとるべき礼であろうか(臣下たる者のとるべき礼ではないのだ)。(2) 清盛は大宰の大式である上に、大國を何國も賜わっていて、(3) それにしても、これはどうしたわけの平茸ひらひらでございますか。(4) この俊寛も僧であるけれども、気性も激しく傲慢な人であって、

3 ① (1) まほしき (2) たから (3) まほしく (4) たき (5) ごとき
②は現代語訳参照。

(解説) ()に使う助動詞の判断は、「まほし」が未然形接続、「たし」が連用形接続、「ごとし」が連体形か助動詞「の」が「に」接続することをつかむ。活用形は2と同じに下の語との関係で知る。

(現代語訳) (1) 木こりも(美しい)花の陰ではやはり休みたいのだから、(2) 難所に落ちて死にたくはない。(3) 京に上って宮仕えもいたしとうございしますが、(4) 家に(植えて)ありたい木は、松と桜(である)。(5) 和歌や管弦(に関する書物)や「往生要集」のようなもの抄本を入れた。

●ポイント3の例歌の現代語訳
山が高いので(手に触れることもできないで)見い見いしながら帰つて来たその桜の花を、風は(揺らしたり散らしたり)思うままにしているよ
うだ。

14 助詞 (1) —— 格助詞・接続助詞のはたらき

P 30 ~ 31

- 1 (1) ウ (2) イ (3) ア (4) エ (5) オ (6) キ (7) サ (8) カ
(9) ケ

(解説) 文の意味を正しくとって知るのである。迷いそうなのは(9)の「より」である。動作の起点ともとれるが、語群に「即時の反応」がある。文意を考え、どちらがよりの確かを判断する。

(現代語訳) (1) 鮒をはじめとして、川の魚も海の魚も、(土佐日記) (2) 十二月二日に、京へ入る。(更級日記) (3) 世の中には理解できない事が多くあるものである。(徒然草) (4) たいそう美しい様子の僧で、黄色の袈裟を着た僧が(夢の中に現れて)来て、(更級日記) (5) 秋風に堪えきれないで散ってしまう(そして風まかせでどこへ飛んで行くのかゆくえがわからない)紅葉のように、身の行く末が定まらない私も悲しいことである。(古今集) (6) 歩いて参詣するので道は遠い。(梁塵秘抄) (7) いつもよりも物思いをしている様子である。(竹取物語) (8) 大津から浦戸をめざして(船を)漕ぎ出す。(土佐日記) (9) 名前を聞くやいなや、すぐに(その人の)顔かたちは推測されるような気がするのだが、(徒然草)

2 (1) A (2) A (3) B (4) D (5) A (6) B (7) C (8) B
(9) D

(解説) (1)~(4)はポイント2の◎印を頭に入れて判断しよう。(1)は時を表し、(2)は比較の基準を表す「に」である。(5)~(7)は、「し」に「スル」の意味「スル」という動詞のはたらき)が認められれば、サ変動詞「す」の連用形+接続助詞「て」であり、体言・連体形については格助詞、連用形に接続していれば接続助詞である。(8)・(9)は、上下をつなぐものであれば接続助詞「て+助動詞」の「て」は完了・強意の助動詞「つ」の未然形・連用形と考えよう。

(現代語訳) (1) 桂川を、月の明るい時に渡る。(土佐日記) (2) 深い志はこの海(の深さ)にも劣らないだろう。(土佐日記) (3) 十月の下旬であるのに、紅葉は(まだ)散らないで盛りである。(更級日記) (4) ああたりは、たいそうなんとなく騒々しくなっております。(源氏物語) (5) さきほどの隨身に命じて(返歌を)おやりになる。(源氏物語) (6) どの事もすべて成し遂げることがなくて、わが身は老いてしまう。(徒然草) (7) 失敗をするな。気をつけて降りろよ。(徒然草) (8) さらに先へ行って駿河の国に着いた。(伊勢物語) (9) この男のはぞき見てしまった。(伊勢

物語)

- 3 (1) 月は有明けの月であつて、光は薄らいでいるものの月の形ははつきりと見えて、(源氏物語) (2) 十月(の時雨しぐれが)やむ間もおかずにもしも降つたならば、どこの里の宿を借りたらよいだろうか。(万葉集) (3) 吉野の山が曇つて雪が降ると(いつも)、麓の里ではしきりに時雨が降ることであるよ。(新古今集)

(解説) (1)は逆接の接続助詞「ものから」の訳し方である。(2)・(3)は「未然形+バ」(仮定条件)と「已然形+バ」(確定条件)の訳し方である。確定条件には三つの場合がある。①「ノデ・カラ」と訳して、原因・理由を示すもの、②「ト・トコロ」と訳す偶然的条件を示すもの、③「ト、イツモ・トカナラズ」と訳す恒常的条件を示すものである。(3)は③である。なお、(2)の「せば……まし」は反実仮想の文型だが、ここは未来に関する仮定となっている。

15 助詞 (2) — 副助詞・係助詞のはたらき

P 32 ~ 33

- 1 (1) だに (2) さへ (3) すら

- 2 (1) カ (2) ア (3) オ (4) エ (5) イ (6) ウ

(解説) 1の三つの助詞はすべて体言・活用語の連体形・助詞につくので、接続では区別できない。三つの助詞の示す意をしっかりと覚えて、文意を考えて判断するしかない。2も同様に各助詞の示す意味をはっきり知っておくことが大切である。(5)・(6)がむすかしいと思うかもしれないが、会話文につく「など」は引用である。

(現代語訳) 1 (1) 散つてしまつてもせめて香りだけでも(枝に残しておいてくれ。梅の花よ、(お前が)恋しくなつた時の思い出にしようから。(2) 春雨に(濡れて)色艶美しい色も見飽きしないその上に、香りまで心が引かれる山吹の花であるなあ。(3) 夢だけに見てさえもこんなに恋しく思う私は、現実(あの人と)会つたならばましてやどんなであらうか。2 (1) 水をささ喉のどにもお入れにならない。(平家物語) (2) ただ波の白い色だけを見る。(土佐日記) (3) 髪は、背丈より三尺ぐらい

長くて、(落窪物語) (4) 夜がふけるまで酒を飲み話をして、(伊勢物語)

(5) 気心の知れた女房や乳母を(見舞いの使者として)折々におやりになつて、(源氏物語) (6) 「よろしく(帝に)申しあげてください、(中宮にも)申しあげてください」などといって、(枕草子)

3 A ぞ — ける (連体形) B なむ — ける (連体形) C や — らむ (連体形) D か — らん (連体形) E こそ — いみじけれ (已然形) F なむ — 省略されている「なる」 G ぞ — 省略されている「聞く」または「言ふ」

(解説) 係助詞「ぞ・なむ・や・か・こそ」が要求する文末の結び方をきちんと知ろう。入試でも係り結びの結びの語形を問う問題はしばしば出題されている。F・Gの結びの省略に注意すること。

(現代語訳) A 両手を合わせてすくつて水も飲むのであつた。(徒然草)

B 形は(塩田で塩を採るために砂を積みあげた)塩尻のようであつた。

(伊勢物語) C (もう)夜の明け方になつてしまつたのだろう。(更級日記)

D 仏はどのようなものでございましょうか。(徒然草) E この世は無常なのがすばらしいのだ。(徒然草) F 「これが都鳥だよ」というのを聞いて、(伊勢物語) G 帝とお気持ちを合わせになつたのだと(聞きました)。(大鏡)

4 (1) 境の垣根はあるけれども、一つ邸やしろのようだから、(先方から)望んで預かつていたのである。(土佐日記) (2) だいたい月や花を、そんなに目

ばかり見るものだろうか(目ではかり見るものではない)。(徒然草) (3) 鳥などが見つけると大変です。(源氏物語)

(解説) (1)は「こそ——已然形」で文が終止せず、下へ続いていく場合の訳し方である。逆接で続く。(2)は反語「かは」の訳し方である。(3)は係助詞の連語「もこそ」の訳し方である。それぞれ確認しよう。

16 助詞 (3) — 終助詞・間投助詞のはたらき、助詞の総合演習

P 34 ~ 35

1 (1) (禁止)・残っている雪にまじつて咲いている梅の花よ、早く散つてはいけない、たとえ雪は消えるとしても。(2) (自己の希望)・五月が来

17 敬語 (1) — 尊敬語・謙讓語・丁寧語

P 36 ~ 37

- 1 (1) 1 B 2 A (2) 3 A 4 C (3) 5 B 6 A (4) 7 B 8 C

(解説)

難解な敬語はない。ポイントをよく読めばすぐに判断できよう。

- (2)の「候ふ」、(3)の「給ひ」、(4)の「侍り」は補助動詞であることも知ろう。

(現代語訳)

- (1) 昔、田邑の帝と申しあげる帝がいらつしやうた。(2) ほんとうにそのようにお思ひになっていらつしやうたのでしよう。(3) お心が引かれて、丁寧に(入内なさるる)ように お話し申しあげなされた。(4) さきごろ、雲林院の菩提講に参詣いたしましたところ、

- 2 補助動詞 (1) 給ふ (2) 聞こえ・給ひ (3) 給へ・侍る (4) なし (5) まゐらせ・候ふ

(解説)

補助動詞は「6用言(2)」で学習したが、形は動詞であつても、

動詞本来の意味を失い、補助動詞と同じように他の自立語について付属的な意味(敬語の場合は、尊敬・謙讓・丁寧)を添える語である。(1)「おほやけ」は朝廷の意でもあるが、そこにいる中心人物の帝をもう。「奉る」は謙讓語、「給ふ」は尊敬語。(2)「聞こえ」は謙讓語、「させ」は尊敬の補助詞「さす」の連用形、「給ひ」は尊敬語。——線部の主語は帝である。(3)「思う給へあつかひ」は、連語「思ひあつかふ」の間に下二段活用の謙讓の補助動詞「給ふ」が入った形である。「思う」は「思ひ」のウ音便。「思ひあつかふ」は、心をつくして世話をするの意。「ほどに」は原因・理由を表す接続助詞。(4)「賜はら」は「受く」「もらふ」の謙讓語である。(5)の「まゐらす」は謙讓語、「候ふ」は丁寧語である。これらの敬語を正しくつかんで訳したい。

(現代語訳)

- (1) 帝にお手紙をさしあげなされる。(2) このお方の御意見

をだけは、やはり、めんどうで、つらいとお思ひ申しあげていらつしやうた。(3) この五、六日、(私は)ここにおりますが、病人のことを心配して看病しておりますので、隣のことは、聞くこともできません。(4) 私は中宮様がお生まれなされた時から、たいそうお仕え申しておりますけれ

ども、まだおさがりのお召物一枚いただいております。(5) 極楽浄土
 といって、すばらしい所へお連れ申し上げます。

18 敬語 (2) — 注意すべき敬語表現、敬語の総合演習

注意すべき敬語表現、
敬語の総合演習

P 38 ~ 39

- 1 1 (①オ ②コ ③ク) 2 (①エ ②ケ ③ク) 3 (①ウ ②ケ ③ク) 4 (①オ ②ケ ③ク) 5 (①カ ②ケ ③ク) 6 (①キ ②ケ ③ク) 7 (①ア ②ケ ③ク) 8 (①カ ②コ ③ク)

(解説)

敬意の主体(敬意を表している者)は、地の文では作者、会話文では話し手と覚えよう。また、敬意の対象(敬意を受けている者)は、尊敬語の場合は動作の主体(動作をする者)。謙讓語の場合は動作の受け手。丁寧語の場合は話の相手(聞き手)である。

2 「召し」は「呼ぶ」の尊敬語だが、動詞の連用形から転じた名詞とついている。動詞とすれば2①は「ア」となる。3「侍り」は「あり」の丁寧語。4「おはします」は「デアル」の「アル」の尊敬語、袖助動詞であることに注意。7の「おはしまし」は「来る」の尊敬語であるから動詞である。5の「給へ」は下を見よう。打消の補助動詞「ず」の已然形「ね」である。とすると接続から、上の「給へ」は未然形。下二段活用の「給ふ」である。

(現代語訳)

(源氏は聖の庵室に)お上りになって、(自分が)だれである

ともお知らせにならず、たいそうひどく粗末な身なりでいらつしやうたけれども、(身分のあるお方だと)はつきりわかる御様子なので、(聖は)「ああ、恐れ多いことよ。先日(私に)お呼びがありましたお方でいらつしやうたでしょうか。(私は)今は現世のことを考えておりませんので、加持祈禱の方法も、うち捨てて忘れておりますのに、どうしてこのようにおいになったのでしょうか」と、目を丸くしてあわてて、ほほえみながら(源氏に)お会いになる。

- 2 (1) 同じ十三日に、お船にお乗りになる。(2) お手紙は、たびたびさしあげなされる。(3) お酒をお飲みになり、管弦のお遊びなどなされる。(4) 内々に(私の)考えております趣を(帝に)申しあげてください。(5) 夜

もふけてしましましょう。

- (解説) (1)の「たてまつる」は「乗る」の尊敬語。(2)「たてまつれ」は下二段活用の「たてまつる」の連用形で「与ふ・贈る」の謙讓語である。(3)の「まゐる」は「飲む」の尊敬語。(4)の「給ふる」は下二段活用の連体形、謙讓の補助動詞である。「奏す」は天皇に対してだけ用いられる絶対敬語である。(5)「侍り」は丁寧の補助動詞である。

19 古典の常識 — 季節・行事・官職・装束など P 40 ~ 41

- 1 問1 (1) 春霞・(見すてて)行く雁 (2) 五月・(山)郭公 (3) 秋萩・鹿(鳴く) (4) 千鳥 問2 ①さつき ②ア Aむつき B一月イ Aきさらぎ B二月ウ Aうづき B四月エ Aながつき B九月オ Aしわす B十二月

- 2 (1) ① かんだちめ ② てんじょうびと ③ のうし・なおし ④ さしぬき ⑤ すずし ③ ぞうし ④ やりみず ⑤ ⑧ さちょう ⑥ ⑨ うしとら ⑦ ⑩ う

(解説) 1 問1 (1)「見すてて行く雁」とは帰る雁である。他はポイント1の1を見て確認しよう。 問2 ①「五月」は「皁月」とも書く。暦月と季節は折々に入試にも問われる。しっかりと覚える必要がある。 2 ①は「かんだちべ」とも読むが、一般的には「かんだちめ」である。②は「てんじょうびと」と濁らないこと。この二つを含めて、⑥・⑦・⑨などは入試でも読まされることがよくある。ポイント2とあわせて知っておこう。

(現代語訳) 1 (1) 春になって霞が立ちこめるのに、(そのよい季節を見すてて(北の国へ帰って)行く雁は、花の(咲か)ない里に住み慣れているのだろうか。(2) 五月を待つ(て鳴く山にいる)郭公よ。羽を振って去年の古い声で(もよいか)ら) すぐにも鳴いてほしいよ。(3) 秋萩の花が咲いたなあ。(あの歌枕として、また景色のよさで知られる)高砂の尾上の鹿は、(秋萩が咲いたのを喜んで)今しきりに鳴いているだろうか。(4) 夜の千鳥の声が近くなってきている鳴海湯よ。(西に)沈みかけた月(の光)

の中に潮が満ちてきているのだろうか。 2 (1) 上達部や殿上人に對面する人は、(2) 直衣・指貫・練つてない絹の単などを着ている者も、(3) このお邸の中にお部屋を作つて、(4) (庭に流れる)遣水の音ものどやかである。(5) 三尺の御几帳のうしろに控えていると、(6) 清涼殿の北東の隅の、(7) 二十一日、朝の六時ぐらいに船を出す。

20 いろいろな表現 — 倒置・挿入・省略・引用 P 42 ~ 43

- 1 (1) うらうらに照る春日に雲雀あがりひとりし思へば心悲しも (2) 更級やをばすて山に照る月を見てわが心慰めかねつ
2 (1) (しはぶき病にや侍らん) (2) (京より下りし時に、みな子供なかりき)

3 (1) エ (2) イ (3) a エ b ア (4) オ 会話文は(2)の「宿は」、(3)の「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる。こよひより」

(解説) 1 ふつうの文に改めるのであるから、文末は終止形、係り結びがあればその結びの語形、命令形、詠嘆・感動・禁止・願望などの終助詞や間投助詞、和歌なら体言(体言止め)などで文は終止する。それを考えよう。 2 主文脈からはずれて、話し手の補足的説明や感想が加わった部分があるかを検討する。その部分を除いても、文脈上支障がなく、主文の文意がよく通る部分を考えるのである。形式上は、文末ではない「や・か」「む・けむ」「にや・にか」がある部分に注意していくとよい。 3 (1) 「一歩より」の被修飾語「始まる」の省略。(2) 「宿は」の述語(述部)「いづこにある」の省略。(3) a 「こよひより」の被修飾語「始む」の省略。b だが「わりなく思ほし」たのか、その主語が省略されている。(4) 「多くなむ」の結びである補助語「ある・侍る」が省略されている。また、会話文は、引用の「と」や「とて」「など」に注意してつかむ。

(現代語訳) 1 (1) うららかに照っている春の日の光の中に雲雀が舞いあがり(さええずる)、なんとなく悲しいことよ。一人で物思いをしていると。(万葉集) (2) 私の心を慰めることはできないのだ。(私が伯母を捨てて来た) 更級の姉捨山に照る月を見ていると。(大和物語) 2 (1) こ

演習 1

問 1 ① a することもなく所在なげに。 b はつきり見えない様子。ほの暗いさま。 c もののしい。仰々しい。 d そのまま。

② e 粗末だ。 f 奥ゆかしい。 g 親しみがもてる。心がひかれる。

③ h まじめである。 ① すばらしい。清新である。 ① 優美な様子だ。

問 2 A げす B やりど C うづき 問 3 ① 家の内部が、それ

ほど荒れていないことをいう。 ② 「荒れたる宿」という外観と対比して

いったもの。 問 4 主の女性が趣深い心の持ち主で、ふだんからたしな

みとして香をたいていたことをいう。 問 5 門をよく閉めてしまいなさ

いよ。雨が降ると困ります。 問 6 ある人 問 7 ア

(解説)

問 1 基本古語は古語辞典で確認しよう。いくつかの意味の中からその文に適した意味を選択する。 問 2 古典の常識としての読みである。

問 3 ①は基本古語「すさまじ」の意味(興ざめだ。荒涼として

いる)をつかむ。②は「内のさまは」とあるから、外のさまとの対比で

ある。 問 4 客が来たからというので、急いでくゆらせた香の匂いで

ないといっているから、常日ごろからのたしなみと知る。 問 5 「さし

てよ」の「てよ」は、完了の助動詞「つ」の命令形。連語「もぞ」は、

悪い事態を予測して、そうなつたら困るという心配を表す。「……すると

困る……したら大変だ」と訳す。 問 6 この文章で「給ふ」という

尊敬語がだれに使われているかを知る。 問 7 「忘れがたきこと」は、

はつきりと印象・感銘を残すことをいう。

(現代語訳)

荒れている家で、人の訪れもない所に、ある女が世間体を憚ることのあるころなので、することもなく所在なげに閉じこもっているのを、

ある方がお見舞いなさろうとして、夕月がほの暗いうちに、人目を避けて

訪ねておいでになったところ、(その家の)犬がけたたましく怪しんで吠え

るので、召使いの女が出て来て、「どちらから(おいででございませうか)」

と言うその女に、そのまま取り次ぎをさせて(家の中)にお入りになった。

(邸内の)もの寂しい様子は、どうやって(日々を)過ごしているのだから

うかと、たいそう気の毒に思われる。粗末な板敷きの所にしばらくお立ち

になっていると、落ち着いた様子の、若々しい声で、「こちらへ」と言う人がいるので、開け閉めも窮屈そうな引き戸から(ある人は)お入りになつた。家の中の様子は、(外観にくらべて)それほど荒れて趣がないというのではなく、奥ゆかしく、灯火は(部屋の)向こうの方にほんのりと明るい程度であるが、調度品の美しきなどが見えて、(来客のために)にわかにな

いたのでもない香の匂いが、たいそう親しみを感ずる様子に(女主人は)

住んでいる。「門をよく閉めてしまいなさい。雨が降ると困るから。お車は

門の下へ(引き入れて)、お供の人はどこそで(お休みください。)」と(だ

れかがいうと)、(ほかの者が)「今晩は安眠できそうだと」と、そつとささ

やくのも、忍び声であるが、手狭な所なので、かすかに聞こえてくる。さ

で、(訪れたある人は)近況などをあれこれ情を込めて(女主人に)お話し

申しあげているうちに、今度は鶏もにぎやかな声でしきりに鳴くので、(もう夜

めなお話のうちに、今度は鶏もにぎやかな声でしきりに鳴くので、(もう夜

は)明けてしまったのだらうかと、(その鶏の声を)お聞きになるのである

が、夜の明けきらないうちに急いで出て行かなくてはならないような場所

からでもないのに、少しゆっくりなさっているうちに、戸の隙き間が明る

くなるので、(女の心に)忘れられないことなどを言つて、(その家から)

お出でになる時に、(木々の)梢も庭(の草木)も一面にすばらしく青々と

茂っているその四月ごろの明け方(の景色)が優美で趣のあったのを(忘

れずに今でも)思い出しになって、(その家の)桂の大きな木が見えなくな

るまで、今でも(そのあたりを通る時には)見送りなさるといふことであ

る。

基本確認演習

古語読解にあたり、古語の知識は不可欠のもの。入試に頻出する重要古語を再点検し、語い力をアップしよう。

① (1) 突然に(不意に) やつて来て宿泊などするのは、きつと新鮮な感

じがするに違いない。(徒然草) (2) 驚くほど、かわいらしい様子がお添

いになっていらつしやる。(源氏物語) (3) 御容貌や御様子は、不思議な

ほどよく似ていらつしやる。(源氏物語) (4) 三寸ぐらいである人が、と

てもかわいらしい様子で座っていた。(竹取物語) (5) 「こちらへ(おい

でなさい」とおっしゃるが、知らん顔をして(気がつかないで)いる。(栄花物語) (6) ただ一人の子でもあったので、たいそうかわいがっていらっしやうた。(伊勢物語) (7) 何事においても、(話し手が)たいして知ってもない方面の話をしているのは、(そばで聞いていても)にがにがしく聞き苦しいものである。(徒然草) (8) 「どうしてそんなに黙っているの。何かいいなさい。さびしいのに」とおっしゃるので、(枕草子) (9) (日が長くて)暮れにくい夏の日に一日中ばんやりと物思いに沈んでいると、何というわけもなく物悲しいことだ。(伊勢物語) (10) 七夕を祭るのは優雅なことである。(徒然草) (11) 奈良の都は咲きほこる花が美しく照り輝くように、今繁栄のまっさかりであるよ。(万葉集) (12) 世間で評判が高くいらっしやる光源氏を、こうした機会にお見申し上げなさいませんか。(源氏物語) (13) その用事がすんだならば、すぐに帰るのがよい。長く

いるのはたいそうわずらわしい。(徒然草) (14) 廊の戸の開いている所に、そつと近寄つてのぞいた。(源氏物語) (15) 成長していく先の様子が見たい人だなあ。(源氏物語)

(解説) 古今異義語はこうだと思ひこみやすい。文章全体の流れに注意して意味をとりた。また、「あやし」には「怪し」「賤し」の違いもある。「かなし」にも「悲し」と「愛し」がある。古文の「にほふ」は基本的には視覚に関する語であるし、「ゆかし」は、ある対象に心が向かう意であるから、その文に添って、見たい・知りたい・聞きたい・行きたい、などあてはめなければいけない。意味を的確に選ぶことは大切なことである。

演習2

問1 ① すぐれている。 ② まったくひどい。驚きあきれられる。

③ いとわしい。いやな感じだ。 ④ 意外だ。思いがけない。 ⑤ かわいそうだ。気の毒だ。 ⑥ 慕わしく思う。慕う。 問2 1 後伏見上皇が、(雅房を)近衛の大将にも任じたいとお考えになっていたころ。

2 雅房の大納言は、昇進もなさらなかった。 問3 「才かしく、よき人」をさす。 問4 4 根拠がないことである。事実無根のことである。

5 どうしてかわいそうでないことがあろうか(痛ましいことなの

だ)。 問5 すべての生き物を見て、慈悲の心(いつくしみ、あわれむ心)を起こさないものは、人間ではない、ということ。

(解説) 問1 古今異義語である。古語辞典で確かめよう。 問2 主語といたら、すぐ登場人物を確かめること。雅房の大納言、院の近習、院が登場している。訳はやさしい。1は「ばや」(自己の希望)に注意する。

問3 指示語のさす内容はその指示語から前をたどつてつかむ。 問4 4は「跡なし」で、根拠がない。5の「いかでか」は反語の副詞である。

問5 随筆や評論では、作者の主張は冒頭か文末に述べられていることが多い。ここは最後の一文である。

(現代語訳) 雅房の大納言は、学問がすぐれていて、立派な人なので、近衛の大将にもしたいと院が思つていらっしやうたころ、院の側仕えである人が、「ただ今、まったくひどいことを見ました」と申しあげなされたので、「何事か」と尋ねなされたところ、「雅房卿が鷹に餌をやろうとして生きている犬の足を切りましたのを、中へだての垣根の穴から見ました」と申しあげなされたので、いとわしく憎らしくお思ひになつて、ふだんの(雅房への)御機嫌も変わつてしまい、(雅房卿は官位の)昇進もなさらなかった。あれほどの人が鷹をお持ちになつたことは、意外であるが、犬の足(の一件)は、事実無根のことである。うそ(を言われたこと)は気の毒であるが、このようなことをお聞きになつて、(雅房卿を)お憎みになつた院のお心は、まことに尊いことである。

総じて、生きているものを殺し、傷つけ、関わらせて遊び楽しむような人は、(人間ではなく)畜生が互いに傷つけ合うのと同類である。すべての鳥や獣、小さい虫までも、注意してその様子を見ると、(親は)子を思い、(子は)親を慕い、夫婦は互いに連れだち、ねたんだり、怒ったり、(あるいは)欲望が多く、我が身を大切にし、命を惜しんでいることは、まったく愚か

で無知であるから、人間よりもいつつひどいものである。そのもの(動物)に苦しみを与え、命を奪うようなことは、どうしてかわいそうでないことかあわれむ心がないような人は、人間ではない。

演習3

問1 ウ 問2 1 エ 2 ア 3 イ 4 ウ 5 ウ

6 イ 問3 自分に(気の毒だと)同情してくれた人。 問4 ウ 問

5 現代語訳参照。 問6 それほど親密ではない人。 問7 心よき人

の、まことにかどなからぬ人。 問8 ものごとには思いやりが大切だと

いうこと。

(解説)

問2 基本古語である。1は「言ふもさらなり」の省略で、この形

は多い。5の「かど」が「才」^かと迷うかもしれないが、他の語と

もに古語辞典で確認する。 問3・6・7はすべて指示語がからんでい

る。前をたどってつかむ。 問4 「思ひ知る」の意味と「にしがな」(自

己の願望)を知る。また、上の「この人に」「見えにしがな」と言ってい

ることも知る。 問5 ③は連語の慣用句である。④は「さらに……打

消」「え……打消」という副詞の呼応を知る。 問8 この文は頭括型の

文で、最初に作者の言いたいことが表示されているのである。

(現代語訳)

どんなことよりも、情けのあるのが、男はもろん(「あらた

めて言うまでもなく)、女もすばらしく思われる。ちよつとしたことばで

あつても、切実に心に深くは感じなくても、気の毒なことを「お気の毒で

す」とも(いい)、あわれなこと(「しみじみと深く心うつこと)を「ほん

とうにどのように思っていることでしょう」などと言ったのを、人から伝

え聞いたのは、面と向きあつていうのよりもうれしい。どうにかしてこの

(同情してくれた)人に、(あなたのお気持ち)身にしみましたとも知ら

せない(「自分のこと」を)必ず思ってくれるはずの人や、見舞ってくれるはずの人

は、当然のことであるから、格別うれしいとは思わない。(しかし)それほ

ど親密ではない人が、(ちよつとしたこと)に対する返事を気やすくしたの

は、うれしいことである。(こんなことは)たいそうたやすいことであるけ

れども、まったくできないことであるよ。

だいたい、気立てのよい人で、本当に才知のある人は、男でも女でもめつ

たにないものようである。それでもまた(世の中は広いのだから)、そ

んな(すばらしい)人も大勢いるに違いない。

② 随筆(2)

慣用句・副詞の呼応

P 48 S 51

演習1

問1 (1) 中宮定子 (2) B なかよし(仲良し) C さあら

ん人をばえ思はじ (3) なるほど(あなたの顔を見て)嫌いになると大変

だ。それでは(顔を)見せてはいけません(「見られてはいけない」)。

問2 1 辞退する。 2 世話をする。ここは「忠告する」でもよい。

問3 (1) あやまちではすなはちあらたむるにはばかることなかれ。 (2)

過失を犯したときは、改めるのをためらつてはいけない。

問4 お見せ申し上げることができないのです。 問5 a のうし b

てんじよう

(解説)

問1 全文の要旨をまとめたものである。会話文がだれの言葉かを

知る必要がある。一か所『』でくくつてよいところをくくらずにあつ

た。それがCの答えとなつていた。Aは絶対敬語「啓す」で知る。 問

2 は古語の意味。確認しよう。 問3 は常識的な漢文で、格言として日

本でも使われている。 問4 「え……ず」の呼応表現(不可能)を覚

えよう。また、「見え」は言葉上は相手から「見られる」の意味であるが、

ひっくり返して、相手に「見せる」と、ふつう訳す。 問5 は古典の常

(現代語訳)

(頭の弁藤原行成は)何か中宮様に申しあげさせようとしても、

その最初(の取り次ぎのとき)に口をきき始めた私を探し、(私が)下局

(自分の部屋)にいても呼んで来させたり、いつもやつて来て(中宮様

への用件を)言い、実家に(帰つて)いる時には、手紙を書いてきたり、

自分自身でもおいでになつて、「(あなたが)遅く参上するのなら、(私

が)このように申しています」と申しあげに(使いの者を中宮様のところ

へ)さしあげてください」とおっしゃる。「そんな取り次ぎには、別の人が

ごいませう」などと辞退するけれども、(頭の弁は)そのまま承知など

しないであらう。

「(ものごとは)そこにあるものに従い、(きまりなどを)定めず、何事

でも行うことを(古人も)よいこととして行なうようです」と、(私は)お世

話をやき申しあげるけれども、「(これが)私の生まれつきの性分なのです」

はいけません。(殿が)『ああ、もし、その奥がた様よ、何かお話なさい。聞きませう』などとお思いになられたときに、何事かおっしゃいなさい。春の鶯が、竹を荒く編んだまがきの所におとずれて、(美しい鳴き声を)聞かせることがあるように、あまりしゃべらずにかわいらしい様子をしていらつしやい」とお教え申し上げると、「私は乳母より先に承知していますよ。どうしてさしでがましく教えるのか」と、姫君がおっしゃるので、(乳母は)「お心構えが、そのようにしっかりといらつしやるのならば、私は全く安心です」と言った。さてその貴族の所へ嫁入りしたあと、二、三回は少しも話をなさらなかった。(乳母は)少しも話をしないのもどうかと考えているうちに、主人と並んで食事をしているときに、大変おいしい酢莖があつたのを、もっと食べたいとお思いになったのだろうか、(姫君は)膝を立てて、肩を縮めて、(鳥が)羽を整えるようにして、あごを伸ばし、声を作つて、「酢莖が食べたい」と二度、鶯の真似をしておっしゃつた。乳母は(姫君の行為が)あまりに情けなく、あきれ果てたことと思つて、それ以上は言わせないようにしようと思つて、「すぐに持つてきましょう」と言つたところが、(持つてくるのが)遅かつたので、「キトキトキト(きと(早く))と鳥の鳴き声を掛けた」と言つたのであつた。主人も全く気分をこわわしてしまつたことと思われる。

⑧ 物語 (1)

登場人物の把握

P 72 ~ 75

演習 1 問 1 中務の宮・ちひさき君たち・九の君・親(はらから)・左兵衛の督の君・御息所・式部卿の宮・齋宮 問 2 ア・エ・キ 問 3 九の君が中務の宮と結婚してもさしつかえないということ。 問 4 左兵衛の督の君 問 5 3 中務の宮 5 式部卿の宮 問 6 現代語訳参照。

問 7 ①中務の宮の北の方 ②かへる

(解説) 問 1 「故中務の宮」はこの場合「宮」としてまだ生存している。次に三条右大臣殿は人名ではなく三条右大臣邸ということである。また、「右のおほい殿」は「親はらから」で登場し、この部分は「右のおほい

殿の(娘の)御息所」であることを知る。答え方として、「親はらから」と一語になつていたので、このままでもよいが、「親」だけが望ましい。「はらから」は御息所である。また、「親」を三条右大臣・右のおほい殿としてもよい。 問 2 「北の方の御おとうと九の君」から、北の方と九の君が姉妹とわかる。次に「同じ右のおほい殿(右大臣)の御息所」で、御息所が皇妃の呼び名のひとつと知れば、右大臣の娘の御息所だとかめよう。さらに「同じ」から、北の方や九の君と同じと推測できる。とすれば「親はらから」もつかめよう。左兵衛の督の君は九の君に手紙を送る男(思いを寄せる男)である。 問 4 指示語のさす内容は、すぐ前の文から順にさかのぼつて読みとる。 問 5 3 は聞いてどうしたのかと、下の文もあわせて考えたとわかる。5の上の「御息所」は主語である。御息所が、だれがこのごろおいでにならないと言つたのだろうか。 問 6 「心づきなし」の意味と過去推量の「けむ」の訳し方である。 問 7

前半の段で亡くなつてゐる人は一人だけである。また、掛詞はもとの宮に「帰る」と、「菓守」の縁語で「(卵が)孵る」の「かへる」である。(現代語訳) 故中務の宮の北の方がお亡くなりになつてのち、(中務の宮は)小さいお子たちを連れて、三条右大臣邸にお住みになつた。御喪服の期間などを過ぎて、いつまでも独身ではお過ごしになれるはずもなかつたので、あの北の方の御妹の九の君を、そのままらおうとお思いになつたのを、なんでさしつかえがあらうか、そのようにするとよいと親兄弟もお思いになつたのに、どんなことがあつたのだろうか、左兵衛の督の君が侍従でいらつしやつたところだが、その(左兵衛の督の君の)お手紙を(九の君の所へ使いが)持つて来ると(中務の宮は)お聞きになつた。それで不愉快なことだと思ひになつたのだろうか、もとのお邸にお帰りになつてしまつた。その時に(九の君の姉の)御息所の御もとから、

亡くなつた人が幼い子供を残しましたが、せめてあなたが(右大臣邸に残つて)その子供たちを守るだけでもしなければいけませんのに、もうこれまでだとお帰りになる今日の悲しいことよ。

(と歌が贈られた。)宮の御返歌は、

残された子供たちを守ろうと思う心は帰ろうとする心を押しとどめる

のですが、とどまってもそのかきがありそうもないと聞いたこととあつた。

同じ右大臣の(娘の)御息所だが、帝がおかれになつたのち、式部卿の宮がお通い申し上げていらつしやつたが、(なぜかふと)通つていらつしやらなくなつたところに、齋宮の御もとから、お手紙をさしあげなされたので、御息所は、(式部卿の宮が通つて)いらつしやらないことなどを申し上げなされて、(その返事の手紙の)末尾に、

越の白山に降つた雪が人の行き来をなくしてしまい、今は越路には人が通わないように、見捨てられていつて通つていた方も訪れが途絶えて、今はだれも通つてまいりません。

と(書いて)あつた。御返歌はあるのだが、写した本にはないと(書いて)ある。

基本確認演習

① 問1 上(帝)・淑景舎・故殿・僧都の君・宮の御前(中宮)

(解説)

(現代語訳)

「無名という(名の)琵琶を帝が(中宮様のお部屋に)持つておいでになつてゐるのをためしたりなどして、かき鳴らしなどしている」といふので、(行つてみると)弾くのではなく、緒などを手でもてあそんで、「この名は、なんというのですか」などと(中宮様に)申し上げると、「ただもうたわいなく、名前もありません」とおっしゃつたのは、やはりたいそうすばらしいと思われた。

淑景舎(のお方)などが(中宮様の所へ)おいでになつて、お話をなさる折に、「私の手元にとても風情のある笙の笛があります。亡き父上が下さいましたのよ」とおっしゃると、僧都の君が「それは私に下さい。私の所にすばらしい琴がございます。それとお取りかえください」と申し上げなされるのを(淑景舎は)聞き入れもなさらないで、やはりほかのことをおっしゃつてゐるので、(僧都の君は)答えさせ申し上げようと何度も申し上げなされるが、やはり何もおっしゃらないので、中宮様が、「(いななかへじ)という笛の名のように)いや取りかえまいと思つていらつしやるのに(どう

して何度も言うのですか)とおっしゃつた御様子の、非常にすばらしいことはこのうえもない。

演習2

問1 帝・なにがしぬし・繁樹・貫之のぬしの御女 問2 A エ B キ C ウ D ア E オ 問3 1 帝 4 なにがしぬし 5 繁樹 8 帝 11 繁樹 問4 「あり」の尊敬語のラ変動詞 問5 エ 問6 現代語訳参照。 問7 ①問はは ②エ 問8 ア 問9 エ 問10 ウ・オ・カ

(解説)

問1 帝とは書いてないが、「せたまふ」などの二重敬語や「勅なれば」などからつかむ。「なにがしぬし」と「蔵人」、「家あるじ」と「貫之のぬしの御女」はそれぞれ同一人物。「汝」は語り手の繁樹である。 問

2 Aはイと間違ひそうだが、「(A)といはせたまひしかば」↓「もてまゐりてさぶらひしを」と続くことを知る。また「御覧じければ」とも

ある。Bもウと迷うかもしれないが、まだ歌も見えていないので唐突である。また、イも「どういふわけか」だから、「なんだ」というキの方が素直である。Cは下に「住む所なり」とある。Dは下の「あまゆ」の意味

がつかめれば答えられる。Eでは、「衣かづけられ」から判断する。 問

3 1・8は二重敬語が用いられている。4は「うけたまはりて」のたまひしかば」である。だが、だれからうけたまわつて、だれに言つた

のかをつかむ。5は「汝求めよ」と言われたから探して掘つたのである。 11は「衣かづけられ」た者である。 問4 ラ変動詞は四語で、暗記す

べきである。 問5 ウは論外として、若い者ではない繁樹ならわかる

ということから推測する。 問6 「あるやう」は連語で、事情・わけの意味。 問7 「うぐひすの」は主語である。述語をつかむ。また、鶯が

出ているが、梅の木がなくなることへの愛惜の心があると知る。 問8 「あまゆ」の意味を古語辞典で確かめよう。 問9 「かづく」は褒美と

して与える意。「られ」は受身である。 問10 貫之は醍醐天皇の時代の人で、この天皇から「古今集」の撰者の一人として選ばれている。そし

て、古今時代の歌風の特徴は理知的歌風である。また、土佐守となつて帰路のことを「土佐日記」に残している。

(現代語訳) たいそう趣深くしみじみと感じましたことは、この天曆の(村

上天皇の)御代に、清涼殿のお庭の梅の木が枯れてしまったので、(代りの梅を帝が)お探しになりましたが、何某殿が藏人でいらつしやつた時に、

(帝の命を)受け申して、「若い者たちは(梅の木のよしあしを)見てもわかるまい。お前が探せ」とおっしゃつたので、(私は)京中を歩きまわりましたけれども、(よい木は)ございませんでしたが、西の京のどこそこにある家に、色濃く咲いている(梅の)木で枝ぶりの見事な木がありましたので、掘りつたところ、その家の主が、「木にこれを結びつけて持って参りなさい」と(召使いを通して)言わせなかつたので、わけがあるのだろうと思って、持ってまいりましたのを、(帝が)「なんだ」とご覧になると、女の筆跡で書いてありました(歌は)、

勅命なのでたいそう恐れ多いことです。(梅の木はお譲り申し上げますが、いつも通ってくる)鶯が(私の)宿は(どうしたのですか)と尋ねたならば、何と答えましょうか。

とあつたので、不思議にお思ひになつて、「何者の家か」と(人をやってお調べになりましたところ、紀貫之殿の御娘さんの住む所でした。(帝は)「残念なことをしたものだなあ」と恥ずかしがつていらつしやいました。繁樹の一生の恥辱はこのこととございましたでしょうか。といつても実は、「望みどおりの(梅の)木を持ってまいつた」ということで、(褒美の)衣を授けられましたが、それも、辛く思つたことです。

演習3 問1 ありつる子・女君・まらうど (「いもうとと聞き給ひつ」の人)・人々 (女君に仕える女房) 問2 七か所 問3 現代語訳参照。

(解説) 高度の設問である。まず、引用の「と」に注意して、会話文をおさえてしまふとよい。問1 「ありつる子」はわかる。次に「ここにぞ臥したる。……」と答えた相手がいる。文脈を追つてこれが女君と知る。そして、「聞き給ひつ」「大殿籠り」「おぼす」と尊敬語が使われている人がある。これが女君の会話にある「まらうど」と知る。最後は「人々」と書いてある。問2 「ありつる子」の会話は、「ものけ給はる……おはしますぞ」。「廂にぞ大殿籠りぬる……めでたかりけれ」・「まろはここ

に……あな暗である。女君は「ここにぞ臥したる……け遠かりけり」・「昼ならましかば……見たてまつりてまし」・「中将の君はいづくにぞ……物恐ろし」で、「下屋に湯に……ただいま参らんと侍り」は人々の会話である。「ねたく……問ひ聞けかし」は、まらうどの心の中の気持ちである。問3 ①「音に聞く」は慣用句。②「ましかば……まし」の反実仮想をつかんで訳す。

●実際の登場人物は、ありつる子・空蟬の弟の小君。女君・空蟬。まらうど・源氏。人々・空蟬に仕える女房。

(現代語訳) さきほどの子供の声で、「もしもし(お尋ね申します)。どこにいらつしやいますか」と、かすれた声がかわいらしいようにいうと、「ここに寝ています。お客様はおやすみになりましたか。(御寝所が)どんなにか近いことだろうと思つて(恐縮して)いたのに、でもわりに離れているのね」という。(今まで)寝ていた声でとりすましていない声は、(さきほど)子供の声と)とてもよく似ているので、姉だと(まらうど・源氏は)お聞きになつた。「廂の間でおやすみになりました。評判として聞いていた(源氏の)御様子を見ました。ほんとうに、すばらしかったです」と、声をひそめていう。「昼間であつたならば、覗いて拝見したものを」と、眠そうにいつて、(上に掛けていた衣の中に)顔を引き入れた声をする。「しゃくだな。(もつと)熱心に(私のことを)尋ねろよ」と、つまらなくお思ひになる。「私はここに寝ましょう。ああ暗いなあ」といつて、灯火をかきたて(て明るくする)るなどしているようだ。女君は、すぐこの(源氏のいる廂の間の)襖の出入口で、はすかいの所に寝ているらしい。「中将の君はどですか。だれもないような気持ちで、何となくこわいわ」と言うのが聞こえると、(一段下がった)敷居の所に女房たちが寝ていて、返事をするようだ。「下屋にさがりまして、すぐに(もどつて)参りますというこ」とです」という。

は基本古語「あやし」の形容動詞化した語、4は基本古語。問2 古

歌の意味Ⅱ世の中を取り返したいものだよ。そして昔のままのわが身と
思いたい。問3 Aは「移す」に敬意を添える補助動詞、Bは「与ふ」

の謙讓動詞(他動詞)、Cは「乗る」の尊敬語(自動詞)。だが、こうい
う識別のときに自動詞・他動詞の区別までは不要である。問4 「増鏡」
は歴史物語。これと同じジャンルの作品を選ぶ。

(現代語訳) 関東から言つてよこす(指令の) ままに、あの二人の大将軍が
あれこれと処置しきさずして、保元の乱のときの例によるのだろうか、院
を、都以外にお移し申し上げるであろうという取り沙汰なので、女院や宮
様方が、あちらでもこちらでも途方にくれていらつしやることは言うま
でもない。後鳥羽上皇は隠岐の国へいらつしやるはずであるから、まず鳥羽
の離宮に、粗末な網代車で、七月六日にお入りになる。今日を最後の御幸
で嘆かわしくまたしみじみと深く心をうつ。昔の世の中や昔のわが身を取
り返したいものだと思ひになつてもなんにもならない。その日す
ぐに御剃髪なさる。——略——信実の朝臣をお呼びになつて、御肖像をお
書かせになる。(母の)七条院へさしあげなさう。うとしてである。こうして、
同月十三日に(後鳥羽院は)お船にお乗りになる。

14) 日記・紀行(1)

主語・述語の関係

P 96 ~ 99

演習1

- 問1 1 中宮彰子 2 紫式部(或は 女房たち・紫式部たち)
3 道長 4 若宮 5 道長 7 道長 問2 まりたまひつつ ひ
きさがさせたまふ 問3 A ウ B イ C イ D ウ 問4 この
宮の御しと(七字) 問5 この濡れた衣を火であぶつてかわかしている
と願いがかなつたような気持ちがある。 問6 ① イ ② イ ③ イ ④ ウ
⑤ エ

(解説)

問1 主語を問う問題では、敬語に注意する。尊敬語か謙讓語か、
その主体は誰なのかをよく考えること。1 「さす」「たまふ」と二重
敬語になっている。2 「さぶらふ」は謙讓語。紫式部とも、女房たち

とも、その両方ともとれる。3 「ささぐ」は上へ手で持ち上げること。

「うつくしむ」は子供など小さいものをかわいがること。「たまふ」があ
ることなどから、道長が孫を慈しんでいる様子とわかる。4 「たてま
つる」は道長に対する謙讓語。「たまふ」は若宮に対する尊敬語。5 「ひ
きときて」は「あぶらせ」とともに「たまふ」にかかる。道長の行為。

7 「御心に入れて」「おほして」とともに同じ人の行為。尊敬語が使わ
れている。問2 一つの文の中で主語がかわつている例。「まゐりたま
ひつつ」「ひきさがさせたまふ」までは尊敬語が使われているので、道長
の行為。「うちとけて寝たる」「おどろく」は尊敬語が使われておらず、
内容から乳母の行為とわかる。「いとほしく見ゆ」は著者の感想。問3

A 「おどろく」の意味は、①はつと目が覚める。②にわかに気づく。③
意外なことにびっくりする。古文では①の意味が多い。B 「心もとな
し」の意味は、①気がせてならない。②きがかりで待ち遠しい。③も
の足りずに不満に思われる。④あるかなきかのようである。生後間もな
い赤ん坊であることを考える。C 「めでたし」は、申し分なくすばら
しいの意味が多く用いられる。D 「わりなし」は、割無して、物事を
うまく処理しようにも、筋道がつかず、どうにもならない状態を言う。
赤ん坊の行為であるから、ものの判断がつかない、ものあやめもわか
らないであろう。問4 「わりなし」は、問3のD参照。ここでは赤ん
坊がおしつこを道長にかけたこと。問5 存続の助動詞「たり」の連
体形のことには「衣」が省略されている。「思ふ」は胸の中で願うこと。

問6 助詞の種類はしっかり覚えておこう。① 「つつ」は同時・反復・
継続の意味を表す接続助詞。② 「に」には、格助詞の意味もあるが、
ここでは順接の確定条件を表す接続助詞。③ 詠嘆を表す終助詞。④
強調の意味の係助詞。

(現代語訳)

(中宮様は) 十月十日を過ぎても御帳台をお出ましにならない。私たち
は西寄にある御座所に昼夜控えている。殿が、夜中だろうが、夜明けだろ
うがお出でになつては、乳母様の懐(の若宮)を探されるので、乳母が気
を許して眠っているときなどは、(殿がいらしているのを知らず)何の用心

もなく目を覚ますのも、たいそうお気の毒に思われる。(若宮はまだ首がすわらず)危なっかしい時期なのに、自分の心に任せて高く差し上げてはあやされるのも、ごもつともでおめでたいことだ。あるときは、若宮がとんでもないことをしかけなされたので、直衣の前紐を引っ張り解いてお脱ぎになり、御几帳のうしろで火桶にかざしてお乾かしになった。「ああ、この宮のおしつこに濡れるのは、うれしいことだ。この濡れた衣を火にかざしている」と、本当に願いがかったという実感があるよ」とお喜びになる。中務の宮家に関するにご熱心で、私をその宮家と親しい関係にあるものとお思いになって、ご相談なさるのも、内心では実に思案にくれることが多かった。

〔基本確認演習〕

- ① (1) 雀の子を犬君が逃がしつる。(2) 雪のふりたるは言ふべきにもあらず。(3) 憶良らは今はまからむ子泣くらむ そのかの母もあを待つらむそ(4) 白波の浜松が枝の手向け草 幾代までにか年の経ぬらむ(5) 女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなきにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。(6) 我が入らむとする道は、いと暗う細きに、つた、かへでは茂り、物心細く、すずなる目を見ることと思ふに修行者会ひたり。(7) 萩などのいと重げなるに、露の落つるに枝のうち動きて、人も手触れぬに、ふとかみぎまへあがりたるも、いみじうをかしと言ひたることどもの、人の心にはつゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。

4 粟田殿 5 帝 6 粟田殿

〔解説〕

- ① (1) 主語を示す格助詞「が」の用例。(2) 格助詞「の」が主語を示す用例。(5) 「すぐれて時めき給ふ」の「給ふ」は連体形での準体言の用法。下に「更衣」が省略されている。同格を表す「が」にも注意。(6) 「修行者会ひたり」は、修行者に会った、というのではなく、修行者が会った、と解釈する。(7) 文の構造が少し複雑であるが、「萩などのいとあがりたるも」と「いみじうをかし」が主語・述語の関係をつくり、その両者を含めた「萩などのいとあがりたるも」と「萩などのいとあがりたるも」が主語・述語の関係。さらにそれを含めた、「萩

などのいとあがりたるも」が最後の「またをかしけれ」と主語・述語の関係を持つている。② 1・5は「仰せらる」「せたまふ」のように、尊敬語が二重に使われていることに注意する。このような二重敬語は、高度敬意を示し、天皇・皇后など特に身分の高い人の行為に用いられる。二重敬語が使われていれば、その主語は特別に身分の高い人と考えられる。ただし、会話文では敬意は高く表現されるので、二重敬語も広い範囲の人に使われる。

〔現代語訳〕

- ① (1) 雀の子を犬君が逃がしてしまった。(源氏物語) (2) 雪が降っているの言うまでもない。(枕草子) (3) 憶良(私)はもうおいとまをしましょう。(今頃家では)子供が泣いているでしょう。そのあの母(私の妻)も私を待っているでしょう。(万葉集) (4) 白波の寄せる海岸に生える松、その枝に結んだ手向けの幣は、どれほどの歳月を経ているだろう。(万葉集) (5) 女御・更衣がおおせいお仕えなさっていた中に、たいへん高貴な身分ではなかったが、たいそう(帝から)愛されている方がいらつしやつた。(源氏物語) (6) これから私が入つていこうという道は、たいへん暗く細いうえに、つたやかえでは茂り、物心細くて思いがけない目を見ることがだと思つていると、修行者がすがたを現した。(伊勢物語) (7) 萩などが(露で)たいへん重そうであったが、露が落ちると枝がすこし動いて、人も手を触れないのに、さつと上の方へ跳ね上がったのも、実に面白いと言つたことなどが、他の人の心には全然面白くもないのだろうと思うが、また面白い。(枕草子) ② 有明の月がたいへん明るかつたので、(花山天皇は)「あらわである。どうしたらよいであろうか。」と仰せになったのを、(粟田殿・藤原道兼は)「そうかといって、(御出家は)御中止なさるようなことはありません。神璽・宝剣もお移りになってしまったからには。」と、粟田殿がおせきたて申し上げたのは、まだ天皇がお出ましになりました先にも、自ら取つて、東宮の御方にお移し申し上げてしまったので、(天皇が)帰り入りなさることはありそうではないとお思ひになつて、このように申し上げなかつたということである。(大鏡)

演習2

問1 1 長雨 3 五月雨 8 居 問2 尽きることなく物

思いに沈んで 問3 ⑥ 問4 エ 問5 君恋ひわたるけふのながめ

問6 ① イ ② エ ④ ア ⑤ ウ 問7 経ると降る 問8 ウ

問9 やはり言う甲斐がなくはないよ 問10 雨の音 問11 大出水で岸

までひたしている川の深さと和泉式部を慕う宮の恋心の深さ 問12 まさ

かお出ではなりませんまいよ。 問13 B・C・E・H 問14 オ

(解説)

問1 1 「ながめ」は、「長雨(ながあめ)」の約、「眺め(もの思いに耽って、じっとひと所を見ていること)」、「詠め(詩歌を吟ずること)」などがある。

8 「ある」は、「居る(座る)」、「率る(引きつれていく)」などがある。

問2 この「ながめ」は「眺む」の意味。もの思いに耽ること。

問3 ④⑤⑧の主體は女(和泉式部)である。 問4 「折(をり)」は機会、季節のこと。時期に応じて歌を詠んでくるのに感心している。

問5 贈答歌であるのでAの歌から「しのぶ(胸に秘めてひそかに思い慕うこと)」に対応する言葉を選ぶ。

問6 ① Cの歌の「水まさらなむ」と関連の深いもの。

② 「あめの下には君のみやふる(世のなかにはあなただけが生きて辛い思いをしているのでしょうか)」という反語なので、「たれもうき世や(いいえそうではない。誰にとっても辛い世の中ですよ)」と続く。

④ Gの歌の「ふかき心はわれぞまされる」を「さ」で受けている。

問7 雨が降ると月日の中を経過していく、生きていくの意の「経(ふ)」をかけている。

問8 「おどろおどろし」は、音がさわがしいの意味。

問9 「なほ」はやはり、「ず」は打消で、「かし」は強意の終助詞。和泉式部の返歌を詠んで、つまらなくはない、

気のきいた女だと宮は感じている。

問10 「つまなきやど」とは、軒端(つま)のない家と夫(つま)をかけている。

問11 「おほ水の岸つきたる(川)」と「われ」という設定である。

問12 「よも」は、打消の助動詞と呼応して、不確定ではあるが、万一にもそのようなことはあるまいと見込まれる意味を表す。

「しも」は強意。「じ」は推量の打消。「かし」は強意の終助詞。

問13 和泉式部の歌は宮の恋心を表してくる歌を機転をもってそらしているものと、もの思いに沈んでいる様子を歌っているものである。

問14 ア・イ・エは事実に反する。女の家が実際に大

水の危機にあっているわけではない。ウ、女の返歌は全て宮の歌をさらりと受け流している。時節にあわせ歌を送ることを双方が楽しんでいる。(現代語訳) 雨がひどく降ってたいそう手持ちぶさたな日が続いて、女は、雲の切れ間もない長雨に、自分はどうなってしまうのだろうと、いつまでも物思いに沈んで、「言い寄る男たちはたくさんいるけれど、今の私は何ともたえる気がないのに、世間の人々はいろいろ噂をしているようだが、それも私が世にあるから(噂されるのだ)」と思って日を送る。帥の宮から「雨の日の手持ちぶさたをどのようにしておいでですか」と言って歌が送られてきた。

A おほかたに：あたりまえの五月雨が降っているとあなたは思っておいでではありませんか。だがまことは、私があなただけを思っているのですよ。

沈んで落とす涙が長雨となって降り続けているのですよ。

とあったので、タイミンクをはずされず(五月雨にかけて恋心をお表しになる)のを興味深く拝見した。しみじみと物思いをしていた、ちょうどその時だったので、(余計にうれしかったのだろう)と思いつながら、

B しのぶらむ：私のことを恋慕ってくださっているだろうなどは少しも知らないで、(愛されぬ身と)思い知って(私の落とす涙によっての)雨とばかり思っておりましたよ。

C ふれば世の：長雨の降る中を、生き長らえておられますと、この世のつらさがしみじみと身に思い知らされますので、(私の落とす涙によって降っている)今日の長雨によって水が増水して、こんな私を押し流してほしいと願っております。

私を受け取ってくれる岸はあるものなのでしょうか」と申し上げたのを、宮は御覧になって、すぐさま便りをくださって、

D なにせむに：どうして身を捨てようなどと思っていらいっしやるのでしょうか。この世の中で、あなた一人が生き長らえていることのつらさを味わっているではありませんよ。

誰にとってもつらい世の中ではありませんか」と書いてあった。

(陰曆の)五月五日になった。雨はやはりやまず降り続けている。先日の

私のお返事がいつもより物思いのつった様子であったので、(宮は)ふびんにお思い出しになって、ひどく雨が一晚中降り続いたそのよく早朝に、「今夜の雨の音は恐ろしいまでのすごさでした」などとお便りにお書きくださったので、

E よもすがら：一晚中、(宮様のこと以外の)何を考えることがあったでしょうか。窓を叩く雨の音を聞きながら(私は宮様のことばかり考えておりました)。

(『降る雨に出でて濡れぬ我が袖のかげにみながらひち(濡れる)まさるかな』という古歌の通り)雨のかからぬ家の中に座っておりますのに、不思議な程(あなたを思い慕う恋の涙に濡れたことです)と申し上げた所、(宮は)やはり相手にするほどの者でなく(つまらない女で)はなかったとお思いになって、お返事に、

F われもさぞ：私もあなたと同じで、あなたのことを思っていたのですよ。雨の音をさせる軒端のない家のようにしっかりとした夫のおいでにならぬあなたのお宅では、どのようにしていらつしやるのだろうと。

昼頃、川の水が増しているといつて人々が見に行く。宮様もご覧になって(お便りをくださり)、「今どうしていらつしやいますか。私は大水の様子を見に行きました。

G おほ水の：洪水が川岸をひたしているその川の深さに比べてみましが、あなたを慕う私の心の深さのほうが勝っておりますよ。そんな私の恋心を知ってくださっているのでしょうか」とあった。私のお返しは、

H 今はよも：まさかこの大水をあなたはおいでになることはありませんまいよ。岸をひたす大水で、恋心をあの川の通りだとお示しになりはして。おいでがないとはつまりません」と申し上げた。

15 日記・紀行(2)

—— 会話文の指摘

P 100 S 103

演習 1

- 問 1 A き B き C こ 問 2 1 ア 2 エ 4 ウ
8 エ 問 3 3 そつばを向いて食べない 6 やかましく鳴き騒ぐけれど 問 4 イ 問 5 あらめ 問 6 ㉠ ア↓エ ㉡ エ↓ウ ㉢ ア↓イ 問 7 おのれゝきこと

(解説)

問 1 A 完了の助動詞「つ」に接続しているので連用形「き」。 C

こちらに連れてこいという意味。命令形。 問 2 1 これという確かな根拠も原因も関係ない、とらえどころのない状態・気分をいう。

「あなかま」は、「あな、かまし」を約したもの。「あな」は感動詞。「かまし」はやかましいの意味。人の話し声のうるささや、話の内容の不快感が神経にさわったとき、話を止めさせようとする言葉。 4 「らうたし」は基本古語。 問 3 3 「ほかさま」は、外様、外方、あらぬ方、無関係な方、そつば。 6 「かしがまし」は音や声が気にさわってうるさいこと。「ののしる」は大声で騒ぐこと。 問 5 鳴くには鳴くだけの理由がきつとあるのだろうの意。「こそ」の結びが省略されている。 問

6 中の君(妹)は作者のことである。地の文では敬意の主体は著者、会話文では会話主である。 問 7 夢で見た不思議な猫の話をする部分は、「夢にこの猫のかたはらに來てゝいみじくあはれるなり」までであり、その中に猫(大納言の姫君)の会話がある。会話部分を探すときには、「と」「とて」「なむ」などの言葉に注意する。また、一人称代名詞「おのれ」の使用や、姉妹の親しい会話と調子の異なった会話部分に着目しよう。

(現代語訳)

同じころにお亡くなりになった侍従大納言(藤原行成)の娘の

残された筆跡を幾度も取り出してはみて、なんとなく悲しい気分でした。ちようどその折、陰暦五月ころ、夜がふけるまで物語を読んで起きていると、どこからやって来たのかわからないが、猫がまことになごやかに鳴いているので、おやと思つて見ると大変かわいげな猫がいる。どこからやって来た猫なのだろうかと思つて見ていると、姉である人が、「しいつ。黙つて。人に聞かせてはなりません。飼いましょう」と言うので、(猫は)とても

室の跡や坐禪(をした)石などがある。また、松の木陰に俗世間を避けて住む人(の姿)もごくまれに見えまして、落ち葉や松笠など(を焼く)煙が立ちのぼっている草庵に心静かに住みついており、どのような人とはわからないけれども、何よりもまず心ひかれて立ち寄っているうちに、月が海に映って、昼の眺めはまた新しく(すばらしい眺めに)なった。入江のほとりに帰って宿を求めたところ、(その宿は海に向かって)窓が開かれた二階造りであって、大自然の中に旅寝をする(ような感じがして)、不思議なほど靈妙な気持ち自然としてくる。

すばらしい松島だ。折からほととぎすが鳴いて飛んだが、ここ松島にふさわしい鳥は鶴である。鶴に身を借りて鳴いて飛べよ、ほととぎすよ。

(曾良はこの句を詠んだが)私は(松島の美景に心を奪われ)句を作るのをあきらめて眠ろうとしたが眠ることができない。かつて住んだ江戸の草庵を出て来た時、(饒別として贈られた)素堂の松島の詩がある。(同じ時に)原安適は松が浦島の和歌を贈ってくれた。頭陀袋だたかぶくろの口を解いて今夜の(心を慰めてくれる)友とする。(袋の中には)また杉風や濁子の(饒別の)俳句もある。

18

評論(1)

——段落と要旨

P 112
S 115

演習1 問1 侍りける 問2 あがたゐの翁の門人中では宣長が最も優れ、国学を大成させたが、歌論は誤りが多いので残念だ。名の通った人の論だから、人を迷わすことも多いだろうし、あがたゐの翁の歌の教えも埋没されそうなので、誤った考えを正し、初学者の道案内のために論ずるのだ。(一九九字) 問3 本居宣長の歌論を非難すること。(十五字) 問

4 ア 問5 国学 問6 宣長は出藍の誉れであること。宣長は師の加茂真淵より優れていること。 問7 現代語訳参照。

(解説) 問1 前段はえせ学者の常道と自分がこのあとに論ずることの立場の違いを述べ、後段は優秀な宣長も歌論だけは欠陥があり、それを正して真理を世人に知ってもらうのだという気持ちを述べている。 問2

宣長は優れている。→歌論だけは誤っている。→著名な学者の論は世人を迷わす。同時に師の正論を消滅さす。→初学者の道しるべにと誤りを正す。この流れをつかむ。 問3 「今私がいたしますこと」の具体的内容をつかむ。この後にすることは書かれている。 問4 宣長の師である。 問5 日本固有の古代精神を探ろうとする学問で、契沖から荷田春満かちあきみつ・加茂真淵と引き継がれて、本居宣長で大成した国学である。 問6 「出藍の誉れ」「青は藍より出でて、藍よりも青し」という成語がある。弟子が師よりすぐれることを言うのである。 問7 は5・6ともに慣用句である。古語辞典で確認しよう。

(現代語訳) だいたい人の書いた書物などを、その欠点を探して非難しげすみ、自分の賢明さを誇ろうと思いたくらむことは、世間のつまらない人々の癖で、それは他人が有名ながねたましいために、無理に負けまいとすることなので、こじつけことが多いのが世の常で、人(の欠点)をあげていおうとして、かえって自分の名を上げる類も多いようである。今私がいたしますことは、そのようなつまらない人のまねをするようなことではありませんが、これには深く思うところがあるのでした。

加茂真淵翁の教えを受けて、その学問の精神を継いだ人は何人もおりませんが、古代のことばの学問に詳しいことは、本居宣長氏が一人優れています。真淵翁が考え残されたことでも、考察して明らかにした類が多く、この人が世に出てから後、この学問の道が整備されたのは、大変な功績であった。(宣長を)ほんとうに出藍の誉とすることは、いうまでもありません。このようにして今(宣長は)世に名高くて、尊び従う人も多くいるのは、たいそうよろこばしいことですが、ただその和歌の論は、ひどく考え違いばかりであるのが残念です。それも並みの程度の人であったならば、そのままにしてもよいでしょうが、あのように優れた人が誤りをいうのは、人が迷うに違いないことであって、一方では真淵翁の歌の教えも、この人によってしまいは、消滅してしまいうるので、今はその誤りを筋道だてて改めて、初学者などが、とんでもない方向に踏み迷わない道しるべにもなればと思いましたので、私はまだ未熟で愚かなことも忘れて、(このように)論ずることであります。

基本確認演習

① 第一段の終わり ①あらじ ② 幼少に師がいず残念。
第二段の終わり ①からず ② 読書量は少なかつた。

(解説) 第一段は幼少時の自分に師がいなかった残念さを述べ、第二段は藩邸に仕えた後は書物があっても読む時間がなく、藩邸に仕える前は貧しくて書物を多くもてなかつたと、読書量の少なさを述べ、最後にこれを受けて、自分は学問の道において不幸であったにもかかわらず、ある程度学びえたのは、忍耐と努力によるものだと感慨をまとめた文である。

(現代語訳) 考えてみると、昔私が三歳であった時から、字を書くことを知った最初に、ふさわしい先生というものがいたならば、このように書法に拙い身ではなかつたであろう。また、六歳の時から、漢詩を素読して習ったことなどのあつた時から、(先生に)従つて学ぶことがあつたならば、文学のことも、少しは進歩することもあつたろう。ましてや十七歳の時から、学問(儒学)の道に志したときから、教え導く人があつたならば、現在の私(のような浅学者)ではなかつただろう。私が藩邸にお仕え申しあげた後になつてからは、自分でも書籍を買い求め、また(主君から)いただいたものも多くなつた。しかし、わが身はすでに出仕の身であつたから、書物を読むことができる時間も多くなかつた。それ以前には、わが身はいつも貧しくて、必要なあれこれの書物は、他人に借りて読みもし、また、筆写しておかなければならない冊もの書物は、自分の手で筆写したので、私が読んだ書物といつても多くはない。だから、学問の道において、不幸なことばかり多かつたことは、私に及ぶ者がいるはずもない。(にもかかわらず)この程度にまで(私が)学びえたことは、いつも堪えがたいことに堪えねばならないことを大切に、世間の人が一度なされることは十度行い、十度なされることは百回したからである。

演習2

問1 ①答へて ②たとへ 問2 詞にあらはれぬ余情、姿に見

えぬ景気 問3 いっこうにすばらしいとも思わないで、 問4 ①よき

女は、男を恨むことがあつてもその気持ちを言葉や態度で表さず、じつと堪え忍ぶ様子を示す。 ②よく境に入れる人々は、直接言動に表さない母

の姿から、女の深い心を感じて、同情と共感をおぼえる。

(解説)

問1 「内容からみて」とある。ある人の問いとそれに対する答えの文であるが、答えの方が、一般的説明と具体的例示に分かれていることを知る。 問2 答えた人は「みづからもち心得ぬことなれば」と言つたあと、「よく境に入れる人々」が言ったことばで答えている。 問3

「さらに——」の副詞の呼応と、「いみじ」の訳し方に気をつける。 問4 傍線だけで考えず、前の「たとへば」の所からじっくりと読みとる。 詞や姿に表れない心情や風趣に幽玄の境地があることを例示していることも頭に入れたい。

(現代語訳)

(ある人が)質問していることに、「お話の趣旨はだいたいわかりました。(それで)その幽玄とかいうような歌体のことになりまして、どのようなものだろうかと理解しがたいのです。その幽玄の歌体についてうかがいましょう」という。答えていうことには、「総じて歌の姿は理解しにくいことです。古い口伝えの秘伝や、奥義を述べた書物などにも、(和歌に関する)難しいあれこれの事柄を、手を取って教えるほどに説明していきすけれども、(歌の)姿のことになりますと、はつきり説明しているものはありません。まして幽玄の歌体は、まずその名前を聞いただけで迷つてしまふでしょう。私自身もそれほど理解していないことなので、明確にどのようなにも申すことができると思いませんが、十分に(歌の)境地に入っている人々の申しなされた趣旨は、結局はただことばに表れていない余情であり、形に現れない雰囲気のことなのでしょう。歌に詠まれた感動もだれもがなるほどと思う深いもので、歌に用いる言葉も感覚美の極点に達すると、これら(言葉に表れない余情、形に現れない気分という)長所は自然に身につくのでしょうか。たとえば、秋の夕暮れの空の様子は、「これといった)色もなく、声もありません。どこにどのような理由があるのだろうかとも思われませんが、何となく涙がこぼれるようなものです。これを歌心のないものは、少しもすばらしいものと思わないで、ただ目に見える花や紅葉を好みます。また、美しい女が、恨めしく思うことがあつても、(その思いを)言葉に表さず、深く堪え忍んでいる様子を、「そうなんだなあ」などとそれとなく察したのは、言葉の限り恨み言をいい、(涙に濡れた)袖

を絞って見せるのよりも、気の毒に思うし、しみじみと心を引かれるようなものです。また、幼い子供などは、こまごまと（大人の方から聞いて）いわせるよりほかには、どうして（その子供の）顔つきを見て（その気持ちを知ることができましようか。この二つのたとえによって、（幽玄ということ）情感に乏しく、歌心の浅い人が、悟りにくいことを知ることができるでしょう。

演習3

- 問1 ①あるはお ②大かたふ ③然れども 問2 1 エ 2 ウ 3 オ 4 ア 問3 古い説に対しては、多くの欠点をおおい隠し、わずかな長所をとりたてる。新しい説に対しては、多くの長所をとりあげず、少しの欠点をいいたてて否定する。 問4 1 ア 2 ウ 3 イ 4 イ

（解説）

問1 大きく分けると、「大かたふるき説をば」で二段に分かれ、前段は新しい学説は世間の学者から憎まれ、認められないことをいい、後段は世間一般の学者にありがちな傾向を述べている。この前・後段をさらに二分するのである。前段は筆者の意見とその具体例、後段は一般的傾向とそうでない場合とにである。 問2 最初から順に読んで学者の態度をメモしていくとよい。 問3 第三段に「こは大かたの学者のならひなり」とある。この段でまとめる。 問4 は現代語訳と内容理解を兼ねている。1は「より来つる」、2は「ものから」、3は「うけぬ」、4は「さてある」に注意しておさえる。

（現代語訳） だいたい世間のふつうの説と違う新しい学説を発表する時には、その説のよしあしにかかわらず、まず一応は、世間の学者に憎まれたり非難されたりするものである。

（その新説を聞いた）ある者は自分が以前から拠り所としてきた説と、非常に違っているのを聞いては、（新説の）よしあしを（十分に）味わったり考えたりするまでもなく、最初からまったく捨てて、取り上げない者もいる。ある者は心の中では、なるほどと思う点も多くあるものの、何といつてもやはり最近の人の説に従うことがいまましくて、よいとも悪いとも言わずに、ただ承認しかねるという顔をして過ごす種類の人もいる。ある

いは、ねたみ心のひどい人は、心の中で（新説を）よいと思いつながら、その説の中の欠点を無理に探し出して、（その欠点によって新説の）すべてを否定しようと計画するものもいる。

総じて古い説については、十の中に七つ八つは悪いものをも、その悪い所を包みかくして、わずかに二つ三つの取りあげてもよい点があるのを、特に取りあげて、できる限り助けて用いようとし、新しい説には十の中に八つ九つがよくても、一つ二つの悪い点を言いたてて、八つ九つのよい点をも、無理に否定して、できる限り、（新説を）自分も用いず、人にも用いさせまいとする、これは大部分の学者の（悪い）傾向である。

しかしながら、またごくまれには、新しい説のよいのを聞いては、古い説の悪いことを悟って、すぐに改めて（新しい説に）従う種類の人もいなくはない。古い説を、どうであろうか（間違っているのではないか）と思って、こうではあるまいかとまでは思いつくけれども、自分自身では（その考えのよしあしを）決める学力がなくて、疑わしいとは思いつながら、そのまましておくなどという者は、新しいよい説を聞いては、これこそ（よくわかるのだ）と、たいそう喜びながら、すぐに（新しい説に）従う種類の人もいることであるよ。

19) 評論(2)

—— 対応表現の理解

P 116 ~ 119

演習1

- 問1 きちんと整った調度で、装飾品とする様式の定まっているものを、欠点なく作り出す工匠。 問2 1 そばつきざればみたる 2 跡もさだまらぬ 問3 臨時のもて 問4 3 ウ 5 ア 6 イ 7 エ 問5 イ

（解説）

問1 「大事として——難なくし出づる」工匠だとはつかめると思うが、まとめることばに苦勞する。「うるはし」「定まれるやう」「難なく」の意を正しくとらえたい。 問2 前段は様式・形式の決まっているものと決まっていない自由なものとの対比である。これを知って読みとる。 問3 後段も自由な想像画と本格的な日本の風景画による画師の腕の対